(19)日本国特許庁(JP)　(12)登録実用新案公報(U)　(11)実用新案登録番号
実用新案登録第3176635号
(U3176635)
(45)発行日　平成24年6月28日(2012.6.28)　(24)登録日　平成24年6月6日(2012.6.6)

(51)Int.Cl.　F I
A01K 97/14 (2006.01)　A01K 97/14

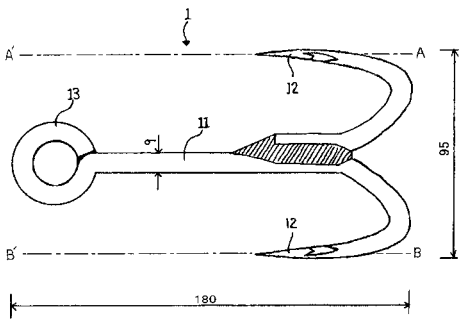
評価書の請求 未請求　請求項の数 1　OL　(全 27 頁)

(21)出願番号　実願2012-2184(U2012-2184)
(22)出願日　平成24年4月13日(2012.4.13)

(73)実用新案権者　710010630
服部　正弘
熊本県熊本市東区東町４丁目１６番９－４０６号
(72)考案者　服部　正弘
熊本県熊本市東区東町４－１６－９－４０６

(54)【考案の名称】大物用落し込みダブルギャフ

(57)【要約】　(修正有)
【課題】ギャフを大物の最短時間でのフッキング及び取り込みに最適な構造とし、又ロープギャフ用補助システムと組み合わせて使用できる様にすることにより、単独で、高場から大物を取り込む事を可能にする大物用落し込みダブルギャフを提供する。
【解決手段】大物用落し込みダブルギャフ１は、軸の一端に二本のフック１２を備え、他端に其の内形が略円であるリング１３を備え、前記二本のフック１２の間の角度幅が１８０°未満であり、前記二本のフック１２は先端近くに其々カエシを有し、且つ前記二本のフックの針先は、其の平面視か正面視に於いて又は其の両方に於いて、前記軸に対して平行であるか又は外側を向いている。
【選択図】図１



【実用新案登録請求の範囲】
【請求項１】
魚体にフックを食い込ませ、魚を取り込むギャフにおいて、軸の一端に二本のフックを備え、他端に其の内形が略円であるリングを備え、前記二本のフックの間の角度幅が１８０°未満であり、前記二本のフックは先端近くに其々カエシを有し、且つ前記二本のフックの針先は、其の平面視か正面視に於いて又は其の両方に於いて、前記軸に対して平行であるか又は外側を向いていることを特徴とする、大物用落し込みダブルギャフ。
【考案の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
本考案は、柄の代わりにロープを使って行う大物用落し込みダブルギャフに関する。関連特許出願として、特願２０１１－１７０９２６及び特願２０１２－４６６５０がある。
【背景技術】
【０００２】
魚はハリスや仕掛けが大きくなると食いが悪くなる為、釣り人は予想される魚種やそのサイズに合わせて、必要以上に大きくならないように注意しながら、それらを使用する傾向にある。従って魚を掛けて竿下まで寄せたあと、それを取り込むには、また別の対策を講じる必要がある。この為に使用するのがタモやギャフである。タモはその構造上大型魚には適さないので、大型魚の取り込みにはギャフが使われる事が多い。通常のギャフは柄が付いていてその先端にフックが付いており、そのフックを魚体に打ち込み取り込む。船釣りの場合は水面から船縁までの距離が１．５ｍから２ｍと短いので取り込みが問題になる事は殆ど無い。問題に為るのは船釣り以外の場合、すなわち、堤防釣り及び磯釣りに於いてである。堤防や磯から大物を狙う場合に工夫が必要になる。磯や堤防からギャフを必要とする大物を、期待を持って狙える場所というのは、多くが外洋や南海の波の荒い離島などの堤防や磯である。それらの堤防はしばしば長さ数百メートル、幅５０－６０メートル、水面からの高さは平均潮位で８－１０メートルもある。１０メートルだとすると、干潮時のそれは１１－１２メートルである。又磯はしばしば足元から切れ落ち、絶壁。そのようは所であればある程、水深が有り、潮通しもよく、大物が期待できるから釣り人は好んでその様な場所に行くことになる。前記堤防の高さが８－１０メートルとした場合、寄せた魚と釣り人との距離は約１０－１３メートルとなる。これをギャフか何か他の方法で取り込まなければならない。
【０００３】
上記項において、基本的な高さ、距離について述べたが、以下にギャフの基本タイプと使い方、危険性に付いて述べる。
【０００４】
「柄付きギャフ」に付いて。柄付きギャフは強度的には其れなりにあるが、継ぎ部で強度が著しく低下するので継ぎ部一箇所、すなわち、振り出し二本継ぎが事実上の限界となり、携行性からして、柄の長さ２メートル前後、全長２．５メートル未満が実質上の限界である。堤防では前記高さの関係から全く使えないものの、沖磯では使える。然しながら、波が上下する荒磯で魚まで２メートルの所まで近づかなければならない以上、このギャフには危険が存在する。（図１６、図１７参照）
【０００５】
「フライングギャフ」について。この方式は柄の代用品として、主としてタモの柄を利用して、魚体にギャフをひっかけて、引っ掛けた後は、タモの柄から、ギャフを切り離して、ギャフに予め作り付けしてあるリングに結んだロープを引っ張って、上げるもので実用性が高く広く利用されている。これは柄の弱点を補うもので実用性が高い。タモの柄は６メートルぐらいまでしかない。少なくとも青物用のしっかりした柄に一定の重さのステンレスのギャフを取り付け、そのギャフからは引き上げ用の太いロープが少なくとも柄の長さ出ている訳であるから、重みがある。釣り人は片手で竿を立てているわけで、残りの片手でこの６メートルタモ柄ギャフを操作してフッキングさせる事は不可能である。必ずも

う一人の人間が必要でこの人が両手でギャフを操作し、フッキングさせなければ、フィニッシュできない。長さ的には沖磯では何も問題ない。堤防においては前記した通り（８－１０ｍ）であるから高さが足りず全く使えない。（図１８、図１９、図２０参照）

【０００６】

「イカリ型ギャフ（仮称）」について。このイカリ型ギャフの基本的な構造は、中心軸の周りの略円周上に３本ないし４本のフックを軸と略平行に等間隔に立て、反対側にリングをつけたもので、このリングにロープを直接結びつける。平均的な大きさとしては間口（フトコロ）が約１４－５ｃｍで直径約３０ｃｍ、長さ約３０－３５ｃｍ、軸径約１０－１２ｍｍで、重さは、約１．５ｋｇ位はある。カエシも無く焼きも入っていない。使い方としては魚を竿下に寄せた後、このイカリ型ギャフをドボーンと魚の沖側に投げ込み、着水点と魚との方向関係から、ギャフが魚に引っ掛かるよう、ギャフ投入者自身が横方向に移動しながら、ギャフを魚に一致させ、フッキングさせるという使い方である。このやり方は有効で安全性も高い。このギャフの問題点について述べると次の通りである。１）一発フッキングが出来ず、２－３回キャスティングのやり直しになることが多い。２）この時釣り人は通常竿を立てている訳であるから、片手は少なくとも塞がっており、残りの片手で上記動作を行うことは不可能である。魚を掛けた本人以外にもう一人の人間が必ず必要である。３）磯では引っ掛かるので使えない。４）魚とギャフとのコンタクトの不確実性が存在し、其れでも掛ける為に間口が１４－５ｃｍもあり、その結果、携行性が著しく劣る。（図２１、図２２参照）

【０００７】

上記の通り、「柄付きギャフ」、「フライングギャフ」、「イカリ型ギャフ（仮称）」について、述べた。結論から言えば、磯釣りでは「フライングギャフ」を使うのが、適切であるが、使用限界は高さ４－５ｍ迄、又この場合でも、最低二人居なければ事実上使えない、ということであり、又堤防釣りでは「イカリ型ギャフ」しか使えないという事であり、この場合でも、最低二人居なければ使えない、という事である。又この場合も一発フッキングが出来ないという問題（不確実性）が存在する。

そして又、ＩＰＤＬ検索の結果、ロープギャフに関して下記の五点の資料が存在する事が分かった。公開実用新案公報（Ｕ）昭６１－７２１７７、実用新案公報（Ｙ２）実公平７－１１５８７、実用新案公法　昭４５－１３１６７、公開実用新案公法（Ｕ）昭６３－９８８５、公開実用新案公法（Ｕ）平２－１１６９７１である。このうち、公開実用新案公報（Ｕ）昭６１－７２１７７と実用新案公報（Ｙ２）実公平７－１１５８７とはガイド道糸通し方式であり、又実用新案公法　昭４５－１３１６７と公開実用新案公法（Ｕ）昭６３－９８８５とはガイド竿尻通し方式であり、公開実用新案公法（Ｕ）平２－１１６９７１はリール上側取り付け試み方式である。この五点に関し、直接は知らないが、釣り人としての感性から、資料に基づきこれらの問題点を以下に論じる。

【０００８】

「公開実用新案公報（Ｕ）昭６１－７２１７７」に関して。このギャフはロープを使って行うロープギャフである。このギャフは実用において使用できると思われる。第一図の符号２（道糸通し、事実上のリング）の中にあるスリット（切れ目）から、道糸をこの「道糸通し、リング」に通して、魚まで落として、ロープで操作するギャフであり、実際に魚は上げられるだろう。このギャフの最大の問題点は魚を寄せてラインにテンションが掛かった状態で、釣り人自身が自分の道糸を自分で掴むことが、硬い竿を使っている時は、非常に困難である、ということである。硬い竿だと、竿を引き起こしても、竿は「つ」の字型に大きく曲がらないから、手が届く所まで、道糸は来ない。ドラッグをフリーにすれば道糸を掴めるがそれは、魚が突っ走るからできない。又、竿を倒して、手をスライドさせて、道糸に片手が届く所まで握り変えていく事も出来ない。何故ならば先端から１．５ｍぐらい（両手の間隔）の所を握って、魚が突進したら、通常竿は簡単に折れてしまう（ドラッグをフリーにすれば折れないが、この場合、同様に魚が突っ込んで根擦れを起こし、ラインが切れる）。又、竿尻を角側（海側）に持ってきて、穂先側を手前側（陸側）に位置させ、竿の中ほどを持って、ラインを掴もうとしてもうまくいかない。何故なら、そ

の場合、釣り人は角際より手前側（角より少し離れた場所）に立たなければならず、魚は角略真下で暴れており、ラインが角を擦れば一発で切れるからである。以上の理由により、釣り人自身がこのギャフを自分の道糸にセットする事は、魚が掛かった状態ではできず、それをやってもらう為には、もう一人の人間が必要である。やり方としては釣り人が自分の立ち位置を後ろに下がりながら，竿をギャフ掛け人の方に寝かせ、竿の弾力とドラッグによるラインのテンションコントロールを釣り人側で維持したまま、ギャフ掛け人に道糸を取ってもらい、ギャフ掛け人はもう一方の手で掴んだギャフのガイドのスリットをラインに掛けることによってラインを内側に通す。其れにより、始めてギャフを落とすことが可能になる。或いは逆にこの人に竿を持ってもらって、上記動作を自分でやらなければならない。又、軸長であるのに加えて、二個のガイド（道糸通し）が硬質固定で折りたたみが出来ない為、携行性に劣る。

【０００９】

「実用新案公報（Ｙ２）実公平７－１１５８７」「実用登録２０９１６０５」について。この考案は、道糸にスライド部材を通して（掛けて）、ギャフ（三本針－１２）を道糸伝いに落とす物である。まともな魚が掛かった状況では、竿を持った釣り人は、自分で自分の道糸は掴めない。通常、「第５図」の体勢にはなれない。この図では人形（人間）の約１．８倍の長さで竿が描かれているが、実際には大きくちがう。磯竿の基本寸法は５ｍから５．４ｍであるから、身長が１６８ｃｍで竿長さが５．３ｍだとすると、竿は身長の約３．１倍であり、図のイメージと実際は大きく異なる。両手間隔は約１．５ｍであるから先端から１．５ｍ位の所を片手で掴まざるを得ず、そうすれば前記（０００８）項に書いた事と同じ事となる。又、逆向きに、竿尻を堤防端側に位置させ、穂先側を手前側に持ってきて、体に対して、斜め後ろ側（水面とは反対側）に穂先を位置させ、５メートル以上ある竿の中ほどを持って、道糸を掴もうとしてもうまくいかない。何故なら、魚は下で暴れて動いており、道糸が堤防端の角を擦れば、それでラインは切れるからである。即ち、本考案にある「第５図」で意図している、道糸を掴むという行為は、実際には極めてリスキーな事であり、其れがやれる場合というのは、竿やライン等が魚に対して、明確に優位にある場合に限られる。そうでない場合に其れをやるとなれば、竿折れ、ラインブレイク、バラシ等がおこる可能性大である。釣り人はなるだけ狙う魚種や予想されるサイズにマッチングした道具やラインサイズで釣りを行おうと努める。釣り人はマンタベルトをした腹部に竿尻をあて、竿を立て、リールのドラッグ機能を有効に作動させている場合に、魚に対して優位性を保て、釣り人がイニシアチブを持って魚をコントロールする事ができる。釣り人が竿先１．５ｍ位の所を持って道糸に何か仕掛けるとなると、そのイニシアチブを完全に失う。その間、魚はじっとしていてはくれない。従って、前記した竿折れ、ラインブレイク、バラシ等が起こる可能性が大である。まともな魚が掛かった状態では、釣り人は自分で自分の道糸は掴めない。物理的にもできないし、リスク的にもできない。ヒラマサ竿を使い、ナイロンハリス１２号で、５キロのヒラマサを竿下まで何とか寄せたものの、竿を支えているのがやっとで、高さは８ｍあるという状況下で、竿先１．５ｍ位の所を釣り人は掴めない。

本考案に於けるやり方では、「公開実用新案公報（Ｕ）昭６１－７２１７７」と同様、釣り人自身がこのギャフを自分の道糸にセットする事は、まともな魚が掛かった状態ではできず、それをやってもらう為には、もう一人の人間が必要である。竿をギャフ掛け人の方に寝かせ、ラインのテンションコントロールを釣り人側で維持したまま、ギャフ掛け人に道糸を取ってもらい、ギャフ掛け人はもう一方の手で掴んだギャフのスライド部材１３の側面の切れ目１３ｃから道糸をこのスライド部材１３に通すか、逆にこの人に竿を持ってもらって、釣り人自身が今言った動作を行う必要がある。従って二人の人間が必要となる。

但し、次の場合は別である。通常の釣り（餌を付けた釣り）をやっているのではなく、ルアー（キャスティング）をやっている場合。ルアーのキャスティングロッドは約３メートルであるから、釣り人がラインを掴んだり、触れたりする事は、相手が特に大きくなければ、可能だろう。

又、軸の周りに三本のフックを円周上に配置する構造である為、対象魚の大きさにより、フック自体の大きさの割に全体が大きくなり、携行性に劣る。（図２３、図２４参照）

【００１０】

実用新案公法　昭４５－１３１６７に関して。１ページ目、左欄下の３行に於いて、「先ず道糸１を誘導環２に入れる、之は竿元より入れるも又開口装置３を外して入れると自由である。」と書いてあるが、日本語が少し変で、正確な意味が分からない。「入れると自由」の「と」は「も」の間違いであると推測し、又竿元は竿尻の意味であろうと推測する。竿元というのがリールの上側の竿上を意味するとなると、大きく意味が違ってくるが、図２と図３に於ける開口装置３を開いただけで、竿と道糸を此処から通して、リール上側にセットできるとはとても思えない。此の文章は「開口部を閉じた状態で竿尻から誘導環２を通してもよいし、又、開口部を開いて、道糸を（＝竿より先で、道糸のみを）誘導環２に通してもよい」という意味だと推測する。先ず、竿より先側で道糸のみを通す場合（＝ガイド道糸通し方式）に付いて論じると、厳しい事になる。開口装置３がどういう物かに関して、何も説明していないので、後は推測するしかない。開口装置３の前後にギザギザが切ってあるように見えるで、此れがねじ止め方式だとすると、先ず五メートル以上ある磯竿（図１では人間と比して２メートル強で竿が描かれているが、磯竿の基本寸法は５ｍから５．４ｍ）の先端近くを掴み、片手で道糸を掴み（魚は暴れている）、もう一方の手で掴んだ、開口部３が事前に開けられた、誘導環２を道糸に掛け、そして開口部３（雌ネジ）を回して相手側（雄ネジ）に噛み合わせるが、螺子というのは噛み込み始めの位置というのが一周３６０°の一定箇所しかない訳で、離れた物を噛み合わせるのに、相手を掴まないで（お互いに合わせないで）噛み始めるとは限らない。そうなると、暴れている魚のラインを掴んだその手で、誘導環の向こう側も掴んで、もう一方の手で開口装置を回さなければならない（その間、魚が逃げないでいてくれればいいが）。

次に、開口装置を閉じた状態で竿に通すやり方に関して述べる。本出願人は「之は竿元より入れるも又開口装置３を外して入れると自由である」と書いているだけで何の具体的な説明もしておらず、後は第一図を提示しているだけである。後は推測するしかない。どうやって第一図の状態に至ったかという事に関して、合理的推測は以下の通りである。釣り人は、マンタベルトをした腹部に竿尻をあて、竿を立て、リールのドラッグ機能を有効に作動させている安定した姿勢で、魚とファイトを行い、魚を足元まで寄せた筈である（竿受けを設置して其れでファイトした場合を除いて）。何故なら其れが、釣り人が魚とのファイトに於いて最も有利な体勢だからである。その姿勢を維持したままギャフの取り付けが出来たのなら、その姿勢を維持した筈である。本件の第一図は其れが出来なかった事を示している。本図では、竿尻を岩角に引っ掛けて片手で２ｍ強に描かれた竿（実際には５ｍ～５．４ｍ）を支えてロープを操作してギャフを掛けようとしている姿が描かれている。磯の上は一般的に凹凸が激しく竿尻を引っ掛ける突起がある場合が多いが、岩質に依っては凹凸が殆ど無くノッペラとした磯も有る（例えば花崗岩質の岩場）。又堤防の上は真平らである。此の図は、自分の都合に合わせて、岩場の地形を描いているにすぎない（竿の長さも）。前記竿尻を腹部に当てた安定した体勢からこの姿勢にどうやって移行したのかという事、そしてどうやって誘導環を竿に通したのかという事だが（腹部には竿尻の跳ね上げる強い力が働いており、単純に此処に通すことはできない）、片手で竿を握り、もう一方の手で誘導環を握り、跳ね上がった竿尻に此の誘導環を掛け、そして、竿先が下になった竿伝いに誘導環を落とし、誘導環が竿先通過後、再び竿を立て、この姿勢に移行した、と推測するのが合理的推測である。ギャフを必要とする大物を相手にしている状況で、片手で、リール周辺で竿を握り、且つ、竿を立てた姿勢に維持する事など完全に不可能である（ドラッグをフリーにすれば其れができるが、そうすれば魚は突っ込んで根ずれを起こしてハリスは切れる）。大物と硬い竿でやり取りしている時、負荷が掛かった竿を立てた状態で保持するのは、竿上の位置的に出来るだけ離れた二点に反対方向の力を加える事によって初めて出来る。両手で握っている竿から、片手を離せば、竿尻は跳ね上がり、竿先は下を向き、竿とラインは一直線となり、魚に突き刺さるような形となる。それで、ガイド（誘導環２）を竿尻に掛ける事はとりあえずできる。しかし、左手で竿を握り、右

手で誘導環２を握っていると、リールのハンドルからも、手は離れてしまっている。魚が向こう側に引っ張っているだけならいいが、首を振り、又手前側にも突っ込んでくる。此処で、必ずラインテンションの喪失が起こる。魚が針掛かりした後大暴れする過程で、針先とカエシが、針が掛かっている部分の傷を大きく広げ、穴が大きくなり、針先の湾曲部が、大きな穴に，曲がりの部分だけで、唯引っ掛かっているだけ（カエシはもう効いていない）の状態になっている。一瞬たりともラインテンションの喪失が起こると、この穴から針が抜け落ちてしまい、バレが発生する。本出願人はガイド（誘導環２）を竿に通したが、唯通したというだけで、ラインテンションの喪失を防ぐ事はできていない。本出願人もそういう事が出来るとの主張をしておらず（従って、当然の事としてその説明も証明もしていない）、提示された図１は其れが出来なかった事を示している。ギャフの取り付けは釣り人に高い負荷（強いトルク）が掛かった状態で行わなければならない。ラインテンションの喪失を一瞬たりとも引き起こさない為には、高負荷下で竿を立てた状態を維持したままギャフのガイドを元竿に巻く、又は通す必要があるが、本考案では其れが出来ていない。

又、本考案は以下の致命的問題を含んでおり、此れを大型魚に適用するのは無理と思われる。１）自在銛１１に関して。誘導環２の中に頭を突っ込ませて自在銛を掛けるとしているが・・そうなればいいが・・、魚が人間の側の都合通りになってくれとは限らない。第四図に於いて、頭が誘導環に入らないで、自在銛１１の先端からカエシ部分のみに、魚が引っ掛かって、然も魚が大きく重心が自在銛１１の左手遠方に位置するような場合を考えてみると、本体自体が糸通し穴７の辺りを起点として、反時計回り方向に回転し、本図では左上方向に立っている自在銛１１が左下方向を向く形となり、魚は自らの重量で落下するだろう。２）自在ピン１２及びその周辺に強度的弱点が有り，大荷重には耐えれそうにない。３）力糸１３自体が細すぎ、大きい魚を上げるのは無理（正確にロープを描くのが面倒だから、ラインを同様の一本線で描いた訳ではなさそうである・・・穴７，９自体が小さい）と思われる（図１では人間に比して２００ｋｇ位の魚が描かれているが幻想を抱かせる漫画にすぎない）。

【００１１】

公開実用新案公法（Ｕ）昭６３－９８８５に関して。一ページ目、左欄中程に「前記枠体を釣り糸に外嵌させて水面に投下される際に」という表現が有るだけで、本体の絵として第一図と第四図を提示している。枠体２，１２にスリットは無いから、竿尻から通したと予想させる物である。しかしながら、第一図は良いとして、第四図は枠体１２内部全体を障害物が塞いでおり、竿やリールを通過させることは不能。依って本件は重大な自己矛盾を露呈しており、無効である（審査請求もされていない）。第四図が無かった事にして、第一図と第二図だけ、見てみても、第二図で竿を脇に抱えており、前記実用新案公法昭４５－１３１６７と同様、片手で竿を掴んで跳ね上がった竿尻に枠体２を掛け、落としたと推測するのが合理的推測である。従ってラインテンションの喪失が起こっている。竿を立てて、ラインテンションを維持したまま、ガイドを元竿に通すという事が、前記実用新案公法　昭４５－１３１６７と同様に出来ていない（本出願人がそういう事が出来るとの主張をしておらず、当然の事として、その説明も証明もされていない）。更に、頭を突っ込むとしているガイド（枠体２、１２）自体が、魚が頭を突っ込んでくれない場合に、障害（邪魔）になってしまって、なかなか針先が魚体に届かない（ガイドが硬い為、魚体表面に当たってしまって、その結果フックの針先が魚体に届かない）という事になってなかなかフッキングしない事態が考えられる。

【００１２】

公開実用新案公法（Ｕ）平２－１１６９７１に関して。両軸リールは必ずリールの上側（リールシートとは反対側）から糸が出るような構造になっている（でないと、リール上側で道糸と竿がくっ付きすぎて、竿を握る事が出来ない）。本件では、第３図と第４図から明らかな様に、リールの下側（リールシート側）から糸が出ているようになっている。開閉リング３に十分な大きさの物を見つける事が出来ず、リングの都合に合わせて、リール上側の絵を描いた結果、こういう事になってしまったものと思われる。此れも、基本的矛

盾で、話の根本が成り立たず、前記考案（昭６３－９８８５）と同様無効である。もっと大きなリングが見つかるか、又は作ったとしても、次のようになる。船底型板のリング内突出部（結ぶ穴１周辺）及びフック針４，５がラインガイド通過時の障害になり得る。竿は、実際は、魚が暴れている訳であるから、ガクガクする。特にフック４，５がバタバタとなり引っ掛かりそうである。カゴが有ればそれにも引っ掛かりそうである。竿途中でラインガイドに引っ掛かったら、如何にもならなくなる。又、フックが針金？一本で固定されているようで、これではまともな魚は上げられそうにない。実用化には程遠い。

【００１３】

此処で、ギャフとは直接関係ないが、「落としダモ」について、述べる。特大の自作円形網（要するにタモから柄を取り外したような物）を予め取り込み予想水中に設置し、其処に魚を誘導しロープで引き上げる物である。まず輪を作るのであるが、輪に硬性を持たせる為に、ワイヤーを通したチューブなどを使ったりして作る。この輪の１２０度間隔三箇所に補助ロープをつけ、この他端を一箇所で集結させ、この集結部にメインロープを取り付け、又前記集結部の近く辺りにブイ（浮き）などを取り付けて、予め、水中に輪が沈むように設置しておき、魚を此処に誘導する。大きさは輪の直径が、巨魚用で１．５－２ｍ、網の深さ２ｍぐらいある。又青物（ヒラマサ）狙いでも、通常３－８Ｋｇ位を狙うので、直径１ｍぐらいはないと、役に立たない。この落としダモは実際に使われていて、有効である。竿を持っている釣り人自身が巨魚用落としダモを、片手で操作することは完全不可能、又青物用においても（魚が小さかったら別だが）、かなり厳しく、事実上無理である。釣り人は暴れている魚を、設置ダモ上に、自分の立ち位置を変えながら、誘導し、タモ係は、潮（水）の抵抗を受けて重い設置ダモを、魚の動きに合わせて、ロープで引き上げる。拠って二人の人間が必ず、必要になる。又携行性が著しく劣る。（図２５参照）

【００１４】

又、通常のタモを使った青物（主としてヒラマサ）釣りについて述べる。タモの柄はグラス製（安価だが重い）とカーボン製（軽いが高価）が有るが、ヒラマサはクロ（メジナ）などと違って大きく重い訳であるから、ヘナヘナの柄ではダメで、ヒラマサが掬えるだけの強度を持っていなければならない。加えて先端のタモ枠（円形環状部）も大きくなければならず、その大きい枠が先端に付くわけであるから、カーボン製であっても、６ｍあれば十分に重い。加えて先端の大きいタモ（網）が上下する水面で潮（水）の抵抗を受けるのであるから、さらに重く、釣り人自身が片手で竿を持ち、片手でタモ入れする事は極めて難しい。さらに言えば、釣り人はリールのドラッグを調整して、やり取りをした結果、魚を竿下まで寄せられたはずである。目の前にタモが出されれば魚は再び突進し、ラインは引き出される（ドラッグを締めればラインは出ないが、切れるから其れは出来ない）。ラインが出てしまえば、竿先と魚との距離がありすぎるから、竿を立てても、魚は傍に寄らない。再びリールを巻かなければならない。左手で竿を持ち、右手でタモ柄を持っていると、リールを巻けない。６ｍの青物用タモを片手で操作する事は無理で両手が必要であり、拠って、中大型青物（ヒラマサ）の取り込みには、竿を握っている釣り人とは別に、タモ掬い専任者が必ず必要になる。但し（小型２－３ｋ）でタモ長さ４ｍぐらいまでで済む場合はこの限りではない。又中大型青物が期待できるような外洋の堤防の高さは前記したとおり（８－１０ｍ）であるからこのタモは堤防では使えない。（図２６参照）

【００１５】

「巨魚ファイトの現状」に付いて、説明を行う。便宜上、３キロから６０－７０キロまでの魚釣りを、現実的なところで、３－４キロから１０キロ前後までの青物（主としてヒラマサ）釣り（磯及び堤防）と、２０キロから６０－７０キロの大型回遊魚（ヒラアジ、磯マグロ）釣り（磯及び堤防）と、１０キロから３０－４０キロの底物（アラ、クエ）釣り（主として磯）との三タイプとに分けて説明する。今まで、途中のファイトスタイルには言及せず、最終取り込み局面で、竿尻を腹部に当てた安定した安定した体勢（スタンディング状態）になっている事を前提として話をしてきた。現実には其れで収まらない、それを超えたファイト、取り込みが存在する。此処で、途中ファイトと最終取り込みの二つの局面に分けて考えてみると、青物はサイズからして、途中ファイト、最終取り込み共に、

スタンディング状態である。大型回遊魚は、堤防と磯とで若干異なる。堤防はドリルで孔を開けてボルトを打つという行為が禁止されているので、現在では、竿受けを使わないで、石鯛竿の強いタイプを使って、大型両軸リールに大量の糸を巻いて、走らせて、疲れさせて、取り込むというスタイルが主流と成りつつある。この場合、途中ファイトは手持ちファイトで、取り込みはスタンディング状態である。堤防で剛力ファイト（置き竿ファイト）を行う場合は、ボルトが使えないので、工夫が必要になる。磯の場合は、アラ、クエ竿を使用して、底物（アラ、クエ）釣りと同様、竿受けを設置する。竿受けは一体型と分離型とがある。ファイト中は竿受けで全荷重をうけるが、取り込み時には、竿尻受けから竿をはずしてスタンディング状態に移行する場合と、竿尻受けから竿を外さないで、そのまま次のステップに進む場合とがある。磯の場合は次のステップでは竿を傾け、相棒に道糸を掴んでもらって、二人のうちの何れかがフライングギャフを握って打ち込みにいく事になる。堤防の場合は、竿を起こした状態で魚をコントロールしながら、相棒が前記イカリ型ギャフを投げ下ろす事になる。堤防及び磯の何れの場合でも、先行技術では一人ではギャフ掛けが出来ないので、事実上魚の取り込みが出来ない。剛力ファイトに於いては、竿受けを利用して、魚の走りを止める点では有利に働くが、取り込みの段階では、剛竿であることは釣り人に不利に作用する。剛竿＋巨魚で高いモーメント＝トルクが発生するからである。其れに加えて、単独では道糸掴みの困難性が存在する。二人の人間が居れば、連携する事により、これらは解決できる事であるが、独りで此れをやるとなると、それはとてつもなく難しいことである。単独での大物、巨魚とのファイト、取り込みの困難性は全般に亘るが、其れを極度に困難にしている事の主体は、単独でのギャフ掛けの困難性にある。以上の理由により、従来法によるやり方では、結局、事実上単独で大物釣り、巨魚釣りには行けなかった。

【００１６】

最後に、「抜き上げ」に付いて触れる。狙っている魚の予想サイズに合わせて、道具や仕掛けを準備している訳であるが、それを大幅に下回る魚が食ってきた場合に、この「抜き上げ」（道糸を直接掴んで引っ張り上げること）が可能になる。此処で、極端な例を考えてみれば、例えば、道糸がシーハンター８０号（強度１５０ｋ）を巻いていた様な場合で４－５Ｋｇの魚が食って来て、竿下に寄せた場合の引き上げは、これだけ道糸が太ければ、ドラッグを緩めて、多少走られて、根に擦られたとしても、道糸は簡単には切れない訳で、又糸の摩擦も大きいので、皮手袋をした手を巻きつけて、４－５Ｋｇの魚を１０メートル上まで引っ張り上げるのは容易にできる。此処で何が言いたいのかというと、捕獲を完了する事がそのままでは困難な状況において何か工夫を凝らすことにより目的を達成する事を「取り込み」と普通いうのであって、抜き上げが可能な状況でそれを行ったとして、それは此処で論ずる「取り込み」の範疇には入らない。

【００１７】

以上により、先行技術、公知技術の説明は完了とする。結論として言えることは、「５－６Ｋｇ以上の魚を、５ｍを超える高場から確実性高く単独で取り込むことは、短竿使用のルアーの場合を除いて、事実上出来ない」という事である（二人の人間がいればこれらの技術のうちその状況に適したものを使用すれば可能な事ではあるが）。仮にたまたま其れが出来たとしても、其れはただ単に幸運だっただけで、まぐれにすぎない。そして、そのまぐれが起こる確率は、魚が大きくなればなるほど、限りなくゼロに近づく。釣り具の進歩は著しい。軽くて強い材質の竿やタモ、高機能なリール、等。それらには科学技術の粋が尽くされている。それらを以ってしても、この単純な課題は解決されていない。

【先行技術文献】

【特許文献】

【００１８】

【特許文献１】公開実用新案公報（Ｕ）昭６１－７２１７７
【特許文献２】実用新案公報（Ｙ２）実公平７－１１５８７
【特許文献３】実用新案公法　昭４５－１３１６７
【特許文献４】公開実用新案公法（Ｕ）昭６３－９８８５

【特許文献５】公開実用新案公法（Ｕ）平２－１１６９７１
【考案の概要】
【考案が解決しようとする課題】
【００１９】
「背景技術」（０００２）から（００１６）において詳しく述べ、（００１７）に於いて結論付けた様に、短竿使用のルアーの場合を除いて、竿下まで寄せた大物、巨魚を、釣り人が十分に離れた高く安全な場所から、誰の手助けも無く単独で、容易に、確実性高く、且つ安全に、実質的に捕獲し、且つ、足元まで上げる事は、先行技術では如何なる技法によっても、事実上成し遂げられていない。そこで、本考案者は、この問題を解決するものとして既に重要な発明を行った。それは特願２０１１－１７０９２６及びその分割出願；特願２０１２－４６６５０に依って示されている。同発明に依って提供される技術は完璧なものであり、同技術を用いることにより、「釣り人が約３キロから約４０キロの魚を、５メートルを超える高場（上限は実用上制限無し）から容易に、確実性高く、且つ安全に単独で掛け、単独で足元まで上げ、取り込む事」が、如何なるタイプの竿であっても、可能となる。然しながら、特願２０１１－１７０９２６に依って提供される大物用落し込みダブルギャフは全ての範囲をカバーしている訳ではない。此のカバーしてない部分をカバーするのが本考案の大物用落し込みダブルギャフである。本考案の大物用落し込みダブルギャフは前記分割出願；特願２０１２－４６６５０に依って提供されたロープギャフ用補助システムと組み合わせて使う事を前提としている。特願２０１１－１７０９２６の大物用落し込みダブルギャフは「二本のフックの針先は、その平面視に於いても正面視に於いても、前記軸に対して内側を向いている」物である。此れは、ギャフが魚体にフッキングした後の引上げ途中に於いて、フッキングしていない残りのフックが障害物に引っ掛かる事を防止する上で有効である。そして此れを実現できたのは特願２０１１－１７０９２６に於いて示されている各取り込みシステムの威力の高さ故である。此の内側を向いた針先が実現出来た為に、同発明の大物用落し込みダブルギャフは、真平らな堤防側面上のみならず、付着物や凸凹の激しい堤防側面上でも、更には、磯の上でも使用する事が可能になった。又フッキングに関しても、前記取り込みシステムの威力により、内側を向いていても確実にフッキングするので事実上何の支障もない。然しながら、此の内側を向いたギャフの針先というのは初めての事であるので、釣り人が此の効用を理解できない事態の発生も予測される。或いは其の効用を理解できたとしても、引っ掛かりの回避（＝トータル的な効用）よりもギャフを落としてからフッキングするまでの時間の短縮を最優先させたいという釣り人のニーズの発生も予測される。針先がフッキングするだけなら、内側に曲がった針先より、平行又は外側に向いた針先の方が早いのは確かである（ロープを引き抜くことによってガッチリ針掛かりさせるときには針先延長線がロープ軸線と一致している、同発明の大物用落し込みダブルギャフが有利であるが）。釣り人が磯には行かず堤防のみで釣りを行い、更にあまり大きな魚を対象としない場合等には上記ニーズの発生が予測される。このニーズにマッチングしたギャフを提供する必要がある。釣り人に選択の自由（オプション）を与える必要がある。釣り人は自分の釣りのスタイル、対象魚の大きさ、場所の状況等に応じて、針先が内側に曲がっているギャフを選ぶも、平行なギャフを選ぶも、外側に張り出したギャフを選ぶも自由である。此の必要にミートするのが本考案の大物用落し込みダブルギャフである。本考案の大物用落し込みダブルギャフは、特願２０１２－４６６５０に依って提供されたロープギャフ用補助システムと組み合わせて、同特願２０１２－４６６５０に依って示されたギャフ掛け方法を用いて実行する事を前提としている。
【課題を解決するための手段】
【００２０】
本考案の大物用落し込みダブルギャフは、軸の一端に二本のフックを備え、他端に其の内形が略円であるリングを備え、前記二本のフックの間の角度幅が１８０°未満であり、前記二本のフックは先端近くに其々カエシを有し、且つ前記二本のフックの針先は、其の平面視か正面視に於いて又は其の両方に於いて、前記軸に対して平行であるか又は外側を向

いていることを特徴とする。
【考案の効果】
【００２１】
本考案の大物用落し込みダブルギャフは、其の構造を大物の取り込みに最適化する為、従来にない特別なものにした。本考案の大物用落し込みダブルギャフと特願２０１１－１７０９２６に依って提供された大物用落し込みダブルギャフとの主要な相違点は、特願２０１１－１７０９２６の大物用落し込みダブルギャフの針先は内向きであるのに対して、本考案の大物用落し込みダブルギャフの針先は平行又は外向きである点である。特願２０１１－１７０９２６の大物用落し込みダブルギャフがカバーしていない部分を本考案の大物用落し込みダブルギャフはカバーしている。又、本考案の大物用落し込みダブルギャフは、特願２０１２－４６６５０に依って提供されたロープギャフ用補助システムと組み合わせて、同特願２０１２－４６６５０に依って示されたギャフ掛け方法を用いて使用する事を前提としている。特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システムは、特願２０１１－１７０９２６に依って提供された各取り込みシステムから、特願２０１１－１７０９２６の大物用落し込みダブルギャフを取り外したものと一致している。特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システムと組み合わせて使用する事により、「ギャフに対するガイドとしての機能を果たす柔軟性の巻き体を、道糸ごと竿に巻くか、或いは巻き体に替わる柔軟性のループ体を竿尻から通してリールの前に持ってきて、それによりギャフを、竿そしてライン伝いに落とし込み、魚の口元に到達させた後、ロープを上下動させることと魚自体の暴れを利用して、口に掛かっている鈎に繋がっているライン上の口元に近い箇所を揺動支点として、ギャフを魚体周りに振ってやり、其れによって、魚体にフッキングさせる」使い方をする。柔軟性を有するロープギャフ用補助システムは、単にギャフの位置を適度な範囲に維持するという機能を有するだけで無く、振り込みに依って部材が魚体表面に回り付き、ギャフのフック針先が、部材のポジショニングを越えて魚体表面に到達する事を容易且つ確実にするので、フックが二本であっても、効率的なフッキングを可能にする。又此のシステムは、ガイド（巻き体又はループ体）を、道糸に取り付けるのではなく、竿を握った手元で竿に巻きつけるか、又は予めループにして竿尻から通して、リール前に持って来られる様にした物であるので、釣り人が安定した姿勢を維持しながら（＝竿の張り及び角度を適正に維持しながら＝ラインテンションの喪失無く且つ高いサージテンションの発生無く）、単独で（自分一人で）ガイド、即ち、其れに繋がるギャフを取り付け、竿伝い、そしてライン伝いに、落す事が可能となる。此れにより、バラシやラインブレイク、竿折れ等のトラブルが発生するリスクが大幅に軽減する。同補助システムと組み合わせて使用する事により、先行技術では、短竿使用のルアーの場合を除いて今まで出来なかった、「竿下まで寄せた大物、巨魚を、釣り人が十分に離れた高く安全な場所から、誰の手助けも無く単独で、容易に、確実性高く、且つ安全に、実質的に捕獲し、且つ、足元まで上げる事」が可能となる。具体的には「約３キロ（小型化すれば其れより小型の魚も可能）から約４０キロの魚を、５メートルを超える高場（実用上上限無しに）から釣り人が単独で掛け、単独で足元まで上げ、取り込む」ことが、如何なるタイプの竿であっても、可能となる。本考案の大物用落し込みダブルギャフと特願２０１１－１７０９２６の大物用落し込みダブルギャフとの主要な相違点である、フックの針先の角度の違いに起因したフッキングに関して説明すると以下のようになる。特願２０１１－１７０９２６の大物用落し込みダブルギャフの針先は内側を向いているが、特願２０１１－１７０９２６に於いて示されている、各取り込みシステムの威力が高い為、何の支障も無くフッキングする。然しながら、内側を向いたギャフの針先というのは初めての事であるので、一部の釣り人が此の効用を理解できず、此れの使用に不安を感じる事態の発生も予測される。針先がフッキングするだけなら、内側に曲がった針先より、平行又は外側に向いた針先の方が早いのは確かである。落し込みダブルギャフのフッキングのプロセスは以下のようになる。針先がわずかに引っ掛かった（カエシ１４が魚体に入るか入らない程度の）第一段階と、魚体がカエシ１４を大きく超え、針湾曲部中央までグサリと刺さった第二段階とがある。ギャフ１を口元に到達させた後、ロープを片手で持って、肘を支点に、鯛の

テンヤ釣りをする要領（ダンベルを上下するようなやり方）で、手先を上下させていると、程無くズシリと重みが掛かる。これは針先がフッキングして第一段階に達した証拠だから、そしたら力一杯ロープを引っ張り上げてやると、ガシリとギャフ１が食い込み第二段階に到り、引上げＯＫとなる。此の時、第一段階に到達することを一義的に考えた場合は針先が平行又は外向きになっていた場合（即ち、本考案の大物用落し込みダブルギャフの場合）が有利と考えられる。但しこの場合、針先方向とロープ方向とが一致していない為、ロープを強く引っ張って引き抜こうとした場合に針先が外れて第二段階に到達させるのに失敗する可能性が有り得る（特に針先が外側を向いている場合、その角度が強ければ強いほど）。外れればギャフが空中に跳ね上がり、トラブる危険性がある。逆に第二段階に到達することを一義的に考えた場合には針先が内側を向いていた方が（即ち、特願２０１１－１７０９２６の大物用落し込みダブルギャフの方が）有利である。針先方向とロープ方向とが一致しているから、引き抜けば失敗無しに第二段階に到達する可能性が高い。但し、此方の方は針先がフッキングする確率（即ち、第一段階が実現する確率）は針先が平行又は外向きの場合（即ち、本考案の大物用落し込みダブルギャフの場合）より低いと言える。フッキング完了後の引上げ時の、フッキングしていない残りのフックの障害物への引っ掛かり回避に関しては明確に針先が内向きの方が（即ち、特願２０１１－１７０９２６の方が）優れており、此方は磯でも使用可能である。釣り人が堤防でしか使用せず、中小型魚の数釣りを主として考えている場合には、平行又は外向き（本考案）の方が、より効果があると言える。トータル的な効用から言えば、針先が内側を向いていた方（特願２０１１－１７０９２６）が、効用が高いといえるが、要は釣り人が何を第一義的に求めているかという事である。魚が針掛かりした後大暴れする過程で、針先とカエシが、針が掛かっている部分の傷を大きく広げ、穴が大きくなり、針先の湾曲部が、大きな穴に，　曲がりの部分だけで、唯引っ掛かっているだけの状態になっている。この状態で釣り人がギャフを落としてフッキングさせようと試みる時、バレないかと気が気ではない訳で、釣り人が、他の何よりもギャフの針先のフッキング（前記第一段階実現）、其れに要する時間の短さを第一義と考える場合、針先が平行又は外側を向いた、本考案の大物用落し込みダブルギャフは其のニーズにミートし、その存在意義がある。

【図面の簡単な説明】

【００２２】

【図１】図１は本考案の大物用落し込みダブルギャフの平面図である。

【図２】図２は本考案の大物用落し込みダブルギャフの正面図である。

【図３】図３は本考案の大物用落し込みダブルギャフの側面図である。

【図４】図４は本考案の大物用落し込みダブルギャフの斜視図である。

【図５】図５は本考案の大物用落し込みダブルギャフに特願２０１２－４６６５０のギャフ用大物補助システムを組み付けた状態を示した説明図である（ラッピングワイヤー両端の両ループ共閉じた状態を示す）。

【図６】図６は本考案の大物用落し込みダブルギャフに組み付けた特願２０１２－４６６５０のギャフ用大物補助システムの、ラッピングワイヤー巻き付けのキーポイントを示した説明図である。

【図７】図７は本考案の大物用落し込みダブルギャフに組み付けた特願２０１２－４６６５０のギャフ用大物補助システムの、竿へ巻き付けが完了した状態を示した説明図である。

【図８】図８は本考案の大物用落し込みダブルギャフに組み付けた特願２０１２－４６６５０のギャフ用大物補助システムのラッピングワイヤー事前ループ方式の竿尻通過前の状態を示した説明図である。

【図９】図９は本考案の大物用落し込みダブルギャフに組み付けた特願２０１２－４６６５０のギャフ用大物補助システムのラッピングワイヤー事前ループ方式の竿尻通過後の状態を示した説明図である。

【図１０】図１０は特願２０１２－４６６５０のギャフ用大物補助システムを組み付けた本考案の大物用落し込みダブルギャフのフッキングのメカニズムを示した説明図である。

【図１１】図１１は特願２０１２－４６６５０のギャフ用大物補助システムを組み付けた本考案の大物用落し込みダブルギャフのフッキングにおける引抜のメカニズムを示した説明図である。
【図１２】図１２は本考案の大物用落し込みダブルギャフに特願２０１２－４６６５０のギャフ用簡易型補助システムの第一のモデル（基本タイプ）を組み付けた状態を示した説明図である。
【図１３】図１３は本考案の大物用落し込みダブルギャフに特願２０１２－４６６５０のギャフ用簡易型補助システムの第二のモデル（第一の変形タイプ）を組み付けた状態を示した説明図である。
【図１４】図１４は本考案の大物用落し込みダブルギャフに特願２０１２－４６６５０のギャフ用簡易型補助システムの第三のモデル（第二の変形タイプ）を組み付けた状態を示した説明図である。
【図１５】図１５は本考案の大物用落し込みダブルギャフに特願２０１２－４６６５０のギャフ用巨魚補助システムを組み付けた状態を示した説明図である。
【図１６】図１６は従来法の柄付きギャフを示した説明図である。
【図１７】図１７は従来法の柄付きギャフを使った取り込み状況を示した説明図である。
【図１８】図１８は従来法のフライングギャフを示した説明図である。
【図１９】図１９は従来法のフライングギャフを使った取り込み状況を示した説明図である。
【図２０】図２０は従来法のフライングギャフを切り離した状況を示した説明図である。
【図２１】図２１は従来法のイカリ型ギャフ（仮称）を示した説明図である。
【図２２】図２２は従来法のイカリ型ギャフ（仮称）を使った取り込み状況を示した説明図である。
【図２３】図２３は従来法のガイド道糸通し方式（仮称）を単独で使った場合のリスキーな状況を示した説明図である。
【図２４】図２４は従来法のガイド道糸通し方式（仮称）のリスクを回避する為の現実的な使用状況を示した説明図である。
【図２５】図２５は従来法の落としダモの使用状況を示した説明図である。
【図２６】図２６は従来法のタモの使用状況を示した説明図である。
【考案を実施するための形態】
【００２３】
先行技術が解決できなかった、００１９項に於いて結論付けた課題（竿下まで寄せた大物を、釣り人が十分に離れた高く安全な場所から、誰の手助けも無く単独で、容易に、確実性高く、且つ安全に、実質的に捕獲し、且つ、足元まで上げる事）を解決するという目的を達成する為に、ギャフの構造を大物の取り込みに最適化する為、従来にない特別なもの（軸の一端に二本のフックを備え、他端に其の内形が略円であるリングを備え、前記二本のフックの間の角度幅が１８０°未満であり、前記二本のフックは先端近くに其々カエシを有し、且つ前記二本のフックの針先は、其の平面視か正面視に於いて又は其の両方に於いて、前記軸に対して平行であるか又は外側をいている構成）にした。柔軟性のガイドを、竿を握った手元で道糸ごと竿に巻きつけるか、予めループにしておいて、竿尻から通して、リール前に持ってこられる様にした特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システムと組み合わせて使用する事を前提としており、両者は共同作業により、其々の役目を果たすことにより、上記課題を解決する事が出来る。又、ロープギャフ用補助システムの高い威力が期待できるので、フック自体の大きさが対象魚の大きさの割には小さくて済み、小さくて済むが故に口の開きに対する耐力（耐荷重性）が高い。更に二本のフックの角度は５０°から５５°で有るので、三～四本のフックを軸の周りの円周上に配置した従来方式のイカリ型ギャフ等と比較した場合、フック単体自体が小さくて済むのに加えて、其の占有容積（嵩）が数分の一で済み、更に、前記ロープギャフ用補助システムは主として柔軟性素材で出来ているので、小さく収納する事が可能であり、携行性に優れている。

【実施例１】
【００２４】
本考案の大物用落し込みダブルギャフの一実施例を示す、図１（平面図）、図２（正面図）、図３（側面図）、及び図４（斜視図）を参照しながら、其の構造の工夫に関して述べる。本考案の大物用落し込みダブルギャフのフック１２の針先は、軸１１に対するその角度が平行な場合と外側に向いている場合とがあるが、図１、図２、図３及び図４は平行な場合を示している（外向きは図示略）。本考案の大物用落とし込みダブルギャフ１は、約３キロから約６０キロまでの魚を対象としている（小型化すれば、其れより小さい魚も可能）が、その最適使用範囲を約３キロから約４０キロと仮定している。このうち単独での実取り込み限界が概略４０キロ（実際は表面状態、摩擦抵抗による）である。すなわち、大物を対象として開発した物であるが、数キロの青物の取り込みでも、タモなどでやるよりは、これでやった方が簡単で確実ですよ、しかも独りでやれますよ、という考え方である。其れを現実の物とする為、幾つかの工夫がなされている。本考案の大物用落とし込みダブルギャフ１は、軸１１の一端に二本のフック１２を備え、他端に其の内形が略円であるリング１３を備え、前記二本のフック１２の間の角度幅が１８０°未満であり、前記二本のフックは先端近くに其々カエシを有し、且つ前記二本のフックの針先は、其の平面視か正面視に於いて又は其の両方に於いて、前記軸に対して平行であるか又は外側をいている事を構造上の特徴としているが、その最適モデルにおいては、フック１２の針先は軸１１に対して平行であり、又フック１２の間の間隔は５０度から５５度である（図３、５０°表示）。従って、ここではその最適モデルを前提として、説明を進める。此処で、フックの数は二本より三本のほうが、そして三本より四本の方が当然の事として、掛かりがよく、且つフックの間隔は５０度から５５度でなくて、なるだけ離れていた方が、掛かりがよく、即ち、軸の周りの円周上に３本から４本のフックが均等間隔で配置された物（即ち、イカリ型ギャフのケース）の方が、最も掛かりがよいと言える。しかし、フックの数が多くしかも離れていれば、魚体にフッキングするフックは一つで、他のフックは魚体から離れた位置で大きく突き出ている事になり、これは魚体を引き上げる際には、表面の障害物に引っ掛かることになるので、引き上げ時の事を考えれば、フックの数は少ない方が、そしてその間隔は狭い方が有利である。本考案の大物用落し込みダブルギャフは、特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システムと組み合わせて使用することを前提としており、同ロープギャフ用補助システムが、ギャフとのコンビネーションに於いて、ギャフをフッキングさせる高い威力を有していることから、前記イカリ型ギャフの構成をとる必要がない。本考案の大物用落し込みダブルギャフは二本のフックの間隔を５０度から５５度としたので（図３、５０°表示）、うまくすれば二本同時に掛かることもあり、二本掛からない場合でも、残りの一本のフック１２は魚体表面近くにあまり突き出ないで位置する事になるので、障害物に引っ掛かる事がイカリ型ギャフの場合に比べて限定的である。
又、間口（フック１２の針先と軸１１との間隔、フトコロ）が、大きいほど掛かりがよいと言えるが、本考案の大物用落とし込みダブルギャフ１はその対象魚の大きさの割には、それほど大きくはない。此れも同ロープギャフ用補助システムの威力の高さ故である。間口が小さくて済むが故に口の開きに対する高い耐力（耐荷重性）を有する。更に、腰曲げ部から軸部にかけて一本の軸付フックにもう一本の短軸フックを溶接しており、此れは弱点の一つであるフック基部を補強していることを意味し、此れは結果的に、フックの伸びに対する高い耐力を発生させ、高い耐荷重を実現している。又、軸方向位置に於いてフックの先端と略同じ程の位置で二軸から一軸に変えてスペースを空ける事により、軸が魚のフッキングに対して、邪魔にならない様に配慮している。高い耐荷重を有するが故に大型魚にも使えるし、その割に小型であるので、数キロの青物でも問題無く使用でき、約３Ｋｇから約６０Ｋｇまでという広い範囲をカバーする事が出来るので、多様な釣りを行う釣り人の要求に対応できる。又、リング１３の内形を略円として、此処に連結される特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システムの接続体又はループ体とのコンビネーションに依る、自身の振れを向上させている。振れは本ギャフの性能を決める重要な要素

である。
図１及び図２のＡ－Ａ´線、Ｂ－Ｂ´線及びＣ－Ｃ´線はフック１２の先端部の軸心の延長線を示し、此れが軸１１と略平行である事を示している。此処で、フッキングのプロセスを細かく見てみると次の様になる。針先がわずかに引っ掛かった（カエシ１４が魚体に入るか入らない程度の）第一段階と、魚体がカエシ１４を大きく超え、針湾曲部中央までグサリと刺さった第二段階である。通常の柄付きギャフは、カエシがない場合も多いが、この第一段階と第二段階とを、柄を操作する事により、略同時に行う。本考案の大物用落とし込みダブルギャフ１はロープギャフ（ロープで操作するギャフ）であるから、これとは大きく異なる。打ち込めないのである。本考案の大物用落とし込みダブルギャフ１は、特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システムを利用して、「ギャフに対するガイドとしての機能を果たす柔軟性の巻き体を、道糸ごと竿に巻くか、或いは巻き体に替わる柔軟性のループ体を竿尻から通してリールの前に持ってきて、それによりギャフを、竿そしてライン伝いに落とし込み、魚の口元に到達させた後、ロープを上下動させることと魚自体の暴れを利用して、口に掛かっている鈎に繋がっているライン上の口元に近い箇所を揺動支点として、ギャフを魚体周りに振ってやり、其れによって、魚体にフッキングさせる」使い方をする。此処で言うフッキングとは正確には上記プロセスの第一段階を指している。実釣では、ギャフ１を口元に到達させた後、ロープを片手（通常右手）で持って、肘を支点に、鯛のテンヤ釣りをする要領（ダンベルを上下するようなやり方）で、手先を上下させていると（見て操作するのではなく又、ロープだからコントロールも出来ない）、程無く（通常１０秒から２０秒程、長くても一分以内）ズシリと重みが掛かる。これは針先がフッキングして第一段階に達した証拠だから、そしたら力一杯ロープを引っ張り上げてやると、ガシリとギャフ１が食い込み第二段階に到達し、引上げＯＫとなる。すなわち、柄つきギャフの様に打ち込むのではなく、引き抜く訳である。尚、補足説明として、ギャフ１が口元に到達したかどうかを目視確認する必要もない。ギャフ１は適度の重みがあるから（小型化して重量が不足する場合はフックの分岐部にリング又はナット等の部材を溶接して其処に重りを取り付けられるようにしても良い・・・図示略）、ロープにその重みがある状態とハリスにその重みが移った状態とは、感覚的に明らかに違いがあり、見なくても判別できる。

【実施例２】

【００２５】

本考案の大物用落し込みダブルギャフは特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システムを組み付けて使用する事を前提としている。図５は本考案の大物用落し込みダブルギャフ１に特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システムの一種であるギャフ用大物補助システムを組み付けた状態を示した説明図である（ラッピングワイヤー両端の両ループ共閉じた状態を示す）。図５、図１０及び図１１を参照しながら、同大物補助システムを組み付けた場合の詳細を以下に説明する。同大物補助システムは脱落防止機能付き円環状連結具２と、ギャフと前記円環状連結具２とを接続する柔軟性を有する接続体３ａと、その一端４１は前記円環状連結具２に掛けられ、その他端４２はフリーとなっていて前記円環状連結具２に掛けることが可能な柔軟性の巻き体４（図５は両端とも連結具２に掛けられ、閉じた状態を示す）と、その一端５ａ１を前記円環状連結具２に掛けられたロープ５ａとを含んで構成される。本考案の大物用落し込みダブルギャフ１に接続体３ａを接続すると図５の状態となる。脱落防止機能付き円環状連結具２は安全環付きカラビナ２である。カラビナ２（標準長さ約１１ｃｍ、軸径約１１φ）の基本的な形状（構造）は略Ｄ型（略台形状）であり、向き合った平行な二辺の長辺のうち、短い方の辺が開閉部（ゲート）２１となっており、その一端側２２は固定ピン２３によって本体側と接続されており、その他端側（開口側）２４が相手側の本体に対して、内側に開閉自在となっているが、ピン２３側の開閉部（ゲート）２１の内部にバネが組み込まれており、開口側２４は常に本体側（外側）に一定の力で押し付けられている。つまり、一定の力で開口側２４を内側に押した時のみ、ピン２３を支点として、内側に開く。通常は、カラビナ２内部にセットされた道具は、外側に対しては力が掛かるが、内側に対しては、力が掛からないか

ら、外れることはない。しかし、一定の条件が揃ったときなどは、其れが簡単におこり得る。大暴れしている魚の口元に送り込むわけであるから、何が起こるか全く予測が付かない。重要な道具を全て、カラビナの中に入れている訳であるから、何が有っても、道具が外れる事があってはならない。此れを実現するのが「安全環付きカラビナ２」である。前記開閉部（ゲート）２１の途中に環（安全環）２５がセットされており、此の環２５は内側に雌ねじが切ってあり、又ゲート２１には雄ねじが切ってあり、組み合わされている。即ち、ピン２３側を手元として見た場合、左に環２５を回せば環２５は後退し（開口側２４：開口自在）、又逆に右に回せば前進し、相手側本体部を噛む（開口側２４：開口不能＝ロック）。此れにより、この円環状連結具（安全環付きカラビナ）２にセットされている各種道具は、魚が如何に暴れようとも、脱落防止される。

柔軟性を有する接続体３ａは、ナイロンシュリンゲ３ａである（シュリンゲは主として山用語で、太くて長いメインロープに対比した、補助ロープを指す）。他端３ａ２を前記安全環付きカラビナ２に掛けられたナイロンシュリンゲ３ａの一端３ａ１を本考案の大物用落とし込みダブルギャフ１の他端に設けてあるリング１３に、振れをよくする為、プーリン結び３ａ３等を利用して遊動可能に接続する。本考案の大物用落とし込みダブルギャフ１は、巻き体４を、道糸ごと実質的に竿に巻き、竿伝い、ライン伝いに落とし込み、魚の口元に到達させた後、ロープ５ａを上下動させることと魚自体の暴れを利用して、口に掛かっている鈎に繋がっているライン１３０－１上の口元に近い箇所を揺動支点として、ギャフ１を魚体周りに振ってやり、其れによって、魚体にフッキングさせることを使用上の特徴としている（図１０、図１１参照）。ギャフ１自身が適度の重さを有していることと、このシュリンゲ３ａが適度な太さと適度な柔らかさ（＝適度な硬さ）を有している事は、ギャフ１の過度の跳ね上がりを抑えつつ、魚体周りでよく振れ、結果として鰓下から魚体中央までの間にギャフ１がフッキングする上で有効である。

巻き体４は、全体としての適度な柔らかさと部分的な硬さとを有するステンレスワイヤー４の両端４１、４２を折り返して、スリーブ４３、４４止めにして、両端にループを作った、ラッピングワイヤー４である。大型用竿（例えばアラ・・・クエ竿）は直径３ｃｍ以上あり、又大型リール（代表的な物ペン、セネター９／０やダイワ、シーライン９００）をセットした場合の、リール上側での竿下から糸上までの寸法は１４－５ｃｍもある。先行技術は此処に、単独で安定性及び確実性を維持しながら（＝竿を立てた状態を維持したまま且つリールのドラッグが機能しない状態を一時的にも引き起こす事無く＝竿の張り、即ちラインテンション及び竿の角度を適正に維持しながら＝ラインテンションの喪失無く且つ高いサージテンションの発生無く）、ガイドを通す事が出来なかった訳である。その結果、釣り人が「単独で、安定した体勢を維持したまま、ガイド、即ち、それに繋がったギャフを取り付ける」という事が出来なかった訳である。特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システムは其れを可能にする物である。ラッピングワイヤー（巻き体）４の一端側のループ４１を前もって安全環付きカラビナ２に掛けて置き、取り込み時に、安定した体勢を維持しながら（竿を立てた状態を維持しながら）、竿に巻きつけ、他端側のループ４２を前記安全環付きカラビナ２に掛けることは、容易に単独でできる。「安定した体勢」とは、「釣り人がマンタベルトをした腹部に竿尻をあて、竿を立て、リールのドラッグ機能を有効に作動させている姿勢」である。この姿勢の時、釣り人は、魚に対して優位性を保て、釣り人がイニシアチブを持って魚をコントロールする事ができるのである。このコントロールを維持しながら、釣り人が自分でギャフ１を取り付けるという、先行技術がなし得なかった事を、特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システムは可能にした。両端にループ４１，４２を備えたこのラッピングワイヤー４の寸法は、最適モデルで、全長６０ｃｍ程で軸径約２ｍｍであり、円形（リング）にした場合の直径は約２０ｃｍ弱である。基本的な使い方は、前記した様に一端のループ４１を前以って前記安全環付きカラビナ２にセットしておき、取り込み時に、ラッピングワイヤー４を竿に巻いて、他端のループ４２を前記カラビナ２にセットする事を基本とするが（数秒でやれる簡単なこの手順は単独で、且つ安定した体勢を維持して、やれることを証明する上で、重要な事であるので、以下に詳しく説明する）、カラビナ２の操作に慣れていなくて、不安

を感じる人は、前以って、他端のループ４２も前記カラビナ２にセットしておき、其れによって、ラッピングワイヤー４のループ（リング）を完成させておき（図５が正にその状態を表す）、取り込み時に、このループ（＝ラッピングワイヤー４）を竿尻から通して、リールを越えて、その前に持ってくることも出来る。
ロープ５ａは、一端をループ５ａ１にして、前記安全環付きカラビナ（円環状連結具）２に掛けてあり、又他端もループにして、ハーケン等の支点（正確に言えば、ハーケンに掛けられた別のシュリンゲに掛けられた別のカラビナ）に掛けておくのがベストである（堤防の上でもハーケンは打てる）。編みロープ５ａで、最適モデルで、太さ８φ－１０φで、長さ約１５ｍ－１７ｍである（長さも太さもいくらでも可能である）。次に、単独可能の論拠となる、ギャフ１取り付けの全ムーブを以下に詳述する。

【００２６】

図５、図６、図７、図８、図９を参照しながら、本考案の大物用落し込みダブルギャフに取り付けられた特願２０１２－４６６５０のギャフ用大物補助システムのガイド（巻き体４）の取り付けの全ムーブを述べる。まず、事前準備として、ロープの一端のループ５ａ１と、接続体（シュリンゲ）３ａの他端のループ３ａ２と、ラッピングワイヤー（巻き体）４の一端のループ４１とをこの順序で、安全環付きカラビナ２に、前記開閉部（ゲート）２１から、掛けて、ラッピングワイヤー４の一端のループ４１だけ、安全環２５を越えて固定ピン２３側に移動させておく。其れにより、前記固定ピン２３を手前側とし、ゲート２１を上側とした場合、手前側から、ロープ５ａのループ５ａ１、シュリンゲ３ａのループ３ａ２、そしてゲート２１の固定ピン２３側（手前側）にラッピングワイヤー４のループ４１が順に位置する事になる。そして、ロープ５ａの他端は前記した様に、支点（ハーケンにシュリンゲ経由で掛けられたカラビナ、図示略）に掛けておく。また、ロープ５ａはキンクが起きない様、十分に扱いて伸ばした上で、又縺れない様にハーケン側が下に位置し、ギャフ側が上に位置するように配慮して置く。安全環２５は完全に後退ではなくロックの少し手前に調整しておく。そして、このギャフセットを足元に、取りやすい様に、注意を持って配置しておく（即ち、図５の状態から、ラッピングワイヤー４の他端のループ４２のみが外れた状態になっている）。此処までが、事前準備で、此処から釣り開始である。魚が掛かって、ファイトを経て、竿下まで魚を寄せた。この時釣り人は通常、前記した「安定した体勢」、即ち、「マンタベルト１４０をした腹部に竿尻１１０－１をあて、左手で竿１１０を持ち、右手をリール１２０のハンドル１２０－１に掛け、両足は少し開き、腰を少し落した体勢」（この時ドラッグは有効に機能している）にある筈である。此処から、「ガイド（巻き体４）の取り付け（＝それに繋がるギャフの取り付け）の全ムーブ」の開始である。１）先ず、基本体勢を維持したまま、腰を少し下げ、右手をリールハンドルから離し、右手の指を、ギャフセットを構成している、安全環付きカラビナ２に掛け、取る。２）次に、竿１１０を持っている左手の人差し指を開き、右手指から、左手人差し指にカラビナ２を受け渡す。この時、各ループ３ａ２、５ａ１は重みがあるので、ラッピングワイヤー４の一端のループ４１を除いて（ループ４１は手で持っては安全環２５を越えられるが、手を離せば安全環２５に引っ掛かる程度にスペース調整済み）、カラビナ２先端側コーナーに寄っており、カラビナ２は先端側が下を向いている。３）左手人差し指も合わせて竿１１０を握る。即ち、左手の他の四本の指は直接竿１１０を握り、左手人差し指はカラビナ２を間に挟んで竿１１０を握る事になる。４）次に、右手で、反対側（＝他端側４２）がフリーになってぶら下がっているラッピングワイヤー４を掴み、竿１１０及び道糸１３０を越えて、反対側に投げ下ろす。５）すると、ワイヤー４は重みがあり、適度に柔らかいから、フリーの側（＝他端側４２）が竿１１０の向こう側に垂れ下がる。６）右手を竿１１０の下側から伸ばし、フリーになっているループ４２を掴む。この時、手のひらを返して（手のひらが腹部側ではなく前方側を向くように）、小指と薬指でワイヤー４のスリーブ４４下（この姿勢だとループ４２が下でスリーブ４４が上に位置しているが、その表現からするとスリーブ４４の上側）を掴み、親指と人差し指でループ４２を摘むようにする。７）摘んだループ４２を上向にして、ワイヤー４をゲート２１の開口部に押し当てやると、ワイヤー４は適度の硬さがあるので、開口部がバネに抗し

て、開き（図６の状態）、パチリと言う音と共に、ループ４２がカラビナ２内部に嵌まり込む。８）右手で安全環２５を右（図６の描写だと左）に回し、開口部をロックする。此れで、ギャフセットの竿へ１１０の取り付けは完了した（図７の状態）。以上により、「安定した体勢」を略維持しながら、取り付けは終了した。後は竿１１０を傾けて落すだけである。

上記ムーブは実際には数秒で終わる簡単なものであるが、この方法のバリエーション（Ｖ）として、カラビナ２の操作に慣れていなくて、不安を感じる人は、前以って、他端のループ４２も前記カラビナ２にセットしておき、其れによって、ラッピングワイヤー４自体のループ（リング）を完成させておき（図５の状態）、取り込み時に、このループ４を竿尻１１０－１から通して、リール１２０を越えて、その前に持ってくることも出来る。この場合は、ラッピングワイヤー４の両端のループ４１、４２を安全環付きカラビナ２に入れて、環２５を前進させ、開口部をロックさせた上で（図５の状態）、取りやすい様に足元に置いておく。此処までが事前準備である。ラッピングワイヤー４は大きなループを形成している。この場合のムーブは以下の通りである。Ｖ１）「安定した体勢」から、少し腰を下げ、ループ（＝ラッピングワイヤー４）を右手で掬い取り、そのまま右手首に掛ける。この時竿尻１１０－１は、腹部下部のマンタベルト１４０に位置し、腹部を後ろ上に撥ね上げる強い力が働いており（上半身前傾）、又左手はリール１２０上側で竿１１０を下から支え、このままだと、ループ４を元竿１１０に通すことは出来ない。Ｖ２）それで、左手はそのままで、右手（手首にはループ４）で竿尻１１０－１近くを掴み（図８の状態）、下に押し、右に竿尻１１０－１をずらすと、竿尻１１０－１がマンタベルト１４０から外れる。Ｖ３）竿尻１１０－１を少し前に出し気味にし、竿１１０の軸線と腕の軸線とを平面視略一致させるよう、手首を捻り起こすと、ループ４が竿尻１１０－１を通過する（図９の状態）。Ｖ４）それで、竿尻１１０－１を再びマンタベルト１４０に戻す。此れで竿１１０上にループ４が通った（実際には右手首に掛かっている）。Ｖ５）そのまま、右手首に掛かったループ４を前進させ、りール１２０を超えて、その前に出す。以上により、ギャフ取り付けは完了した（図７の状態）。後は竿１１０を傾けて落すだけである。

【００２７】

次に、図５、図７，図１０、図１１を参照しながら、ギャフ用大物補助システムを使った、ギャフの１の落とし込み、及びギャフ掛けに関して述べる。以下に、ギャフセットの竿への取り付け完了後の落とし込み及びギャフ掛けについて詳述する。此処で道具（竿及びりール）はヒラマサ竿＋大型スピニングリールの組み合わせ（青物狙い）と石鯛竿又はクエ竿＋大型両軸リールの組み合わせ（大型回遊魚、底物・・・アラ、クエ・・・狙い）が考えられるが、青物狙いはギャフ用簡易型補助システムがベストマッチであるので、そちらで述べる（スピニングリール方式と両軸リール方式とでは手順が若干異なる）。ギャフ用大物補助システムは７－８キロから２３－２４キロ（単独の場合、二人だとその倍）の魚を対象と考えたシステムであるので、石鯛竿又はクエ竿＋大型両軸リールの組み合わせで、大型回遊魚（ヒラアジ、磯マグロ等）や底物（アラ、クエ）を狙っているものとして、話を進める。この場合の手順は以下の通りである（此処では途中のファイト方式には言及せず、最終取り込み局面に於いて、前記「安定した体勢」・・・スタンディング状態・・・になっている事を前提とする。）。前記００２６項に於いて、リール１２０前の竿１１０に道糸１３０ごと、ラッピングワイヤー４が巻かれたステップになった（図７の状態）。次に竿１１０を傾けて落す訳であるが、両軸リール１２０は竿１１０の上側に付いており、竿１１０上にはラインガイドが、立っている訳で、此れが落す際の障害になるので、まず、竿１１０及びリール１２０を１８０度回転させ、リール１２０を下側に向ける。次にラバーグリップの先まで、片手でラッピングワイヤー４をスライドさせる。次に、立てていた竿先を前に倒さなければならない。この時が、唯一緊張する時である（竿１１０の張りが少なくとも弱くなる訳であるから）。この時のやり方は大変重要である。下側に向けた事によって、リール１２０のハンドル１２０－１は左側にきているので、左手をハンドル１２０－１に掛け、巻き方向に力を加え、回しながら（上側・・・正常時・・・だ

と右側面視、時計廻り、下側だと、左側面視、時計廻り、即ち逆）、竿先を下げる。此れで、弛みが生じてバレが発生するということはない。堤防で高さ８メートルだとすると、腰位置１メートルで計９メートル、竿先を３メートル下に下げるとしても（実際には３メートルも下げなくても、ギャフは重みがあるので落ちる）、魚との高度差は６メートルあり、５メートルの磯でやっていたとしても高度差は３メートルあるから、慣れれば、不安を感じることもない。ワイヤー４が竿先を通過したら（通常３－４秒で通過）、再び竿先を立てる。此れで、ギャフ１は自動的に魚の口元に到達する。ギャフ１を口元に到達させた後、ロープ５ａを片手（通常右手）で持って、肘を支点に、鯛のテンヤ釣りをする要領（ダンベルを上下するようなやり方）で、手先を上下させる（図１０の状態）。ギャフ１の重みがロープ５ａに掛かっている状態とライン（＝ハリス１３０－１）に掛かっている状態とは、重みが異なるから、目視確認しなくても、感覚的に、ギャフ１の状況が判別できる。ロープ５ａだからコントロールは出来ないが、程無くズシリと重みが掛かる。これは針先がフッキングした証拠だから、そしたら力一杯ロープ５ａを引っ張り上げてやると、ガシリとギャフ１が食い込み、引き上げＯＫとなる（図１１の状態）。後は引き上げるだけである。この引き上げ時に、本考案の工夫（二本フックの間隔を鋭角・・・５０度から５５度・・・とした事、等）が効果を発揮して、魚がイカリ型ギャフと比べて比較的にスムーズに上がってくる事になる。

【実施例３】

【００２８】

図１２は本考案の大物用落し込みダブルギャフ１に特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システムの一種であるギャフ用簡易型補助システムの第一のモデル（基本タイプ）を組み付けた状態を示した説明図である。図１２を参照しながら、同ギャフ用簡易型補助システムの基本タイプを組み付けた場合の詳細を以下に説明する。同簡易型補助システムは、ギャフの一端側に連設され、リールを越えられる寸法を有する柔軟性のループ体と、同ループ体に脱落防止機能付き円環状連結具を介して連結されるか又は介さないで連結されたロープとを含んで構成される。ループ体７に軟性、繊維系素材（ナイロンシュリンゲ）を使用した物が簡易型大物取り込みシステムの基本タイプである。本考案の大物用落し込みダブルギャフ１にループ体７を接続すると図１２の状態となる。簡易で、機動性が高く、特に動きの激しいヒラマサ等の青物などに適用できる。ループ体７は５φ乃至６φのナイロンシュリンゲの両端をフィシャーマン結び７３等によって結んで、ループ（輪）にした物で、長さは、狙う魚の大きさに合わせる。仮に５キロから１０キロのヒラマサを狙っているとすれば、引っ張った状態での一端部７１から他端部７２までの長さは３４－５ｃｍが適当である。一端部７１を本考案の大物用落し込みダブルギャフ１のリング１３に通して、他端部側７２を一端部側７１中に潜らせ、引っ張ると、長さ約３０ｃｍのループ７ができる（長さには制限ないが、短さには制限あり、即ち、青物に使用される大型スピニングリール又は中型両軸リールを越えられる、通過できる長さが最低必要である）。この時、一端側７１は、二本のフック先端を結んだ線を前とした場合、背側（後ろ側）からリング１３に通す。又、前記フィシャーマン結び７３の結び目は、真他端に位置させないで、左下か右下の何れかにずらす（図は左下にずらした状態を示す）。又ロープ５ｂの一端をこのループ体（シュリンゲ）７に繋ぐが、固定しないで、プーリン結び５ｂ２等を利用して、ループ５ｂ１を作り、ループ体（シュリンゲ）７内を遊動できるようにする。この場合のロープ５ｂの他端はループを作ってカラビナを掛けておくのが、指一本で持ったりできるので、使いやすい（ギャフロープ５ｂは体には絶対に繋がない）。ロープ５ｂは、編みロープで、最適モデルで、太さ６φで、長さ約１５ｍである（長さも太さもいくらでも可能である）。

取り付けのムーブは、もうすでにループ７が出来ているので、基本的に００２６項ギャフ用大物補助システムのガイド（巻き体４）の取り付けの全ムーブの後段のバリエーション（Ｖ）と同じである。１）「安定した体勢」から、少し腰を下げ、ループ７を右手で掬い取り、そのまま右手首に掛ける（この時シュリンゲ・・・ループ７は背側から手首を入れる、其れにより二本のフックが前側、即ち魚側を向く）。この時竿尻は、腹部下部のマン

タベルトに位置し、腹部を後ろ上に撥ね上げる強い力が働いており（上半身前傾）、又左手はリール上で竿を下から支え、このままだと、ループ７を竿尻に掛けることは出来ない。２）それで、左手はそのままで、右手（手首にはループ７）で竿尻近くを掴み、下に押しながら、右にずらすと、竿尻がマンタベルトから外れる。竿尻を少し前に出し気味にし、軸線を平面視略一致させるよう、手首を捻じり起こすと、ループ７が竿尻を通過し、竿上に位置する。３）それで、竿尻を再びマンタベルトに戻す。此れで竿上にループ７が通った（実際には右手首に掛かっている）。４）そのまま、右手首に掛かったループ７を前進させ、りールを超えて、その前に出す。此れで、ギャフセットの取り付けは完了した。以下は落とし込みである。ヒラマサの場合は、リールは両軸リール及び大型スピニングリールの両方が考えられるが、一般的にはスピニングのほうが多い。両軸の場合は、竿及びリールを引っくり返す動作が入るが、これは００２７項のギャフ用大物補助システムを使った、ギャフの落とし込み、及びギャフ掛けで詳しく述べており、其れと同じである。スピニングの場合は以下のようになる。５）此処で、ロープ５ｂの他端のカラビナ（図示略）をボディ周りに掛けておいた場合には、それを尻手リング（石鯛竿の場合）か、ヒラマサ竿の場合だと其れが無いので左手指にカラビナを必ず移す（ギャフ掛けを行う前にそうしないと危険）。６）スピニングリールだとラインガイドは下側を向いているから、ギャフを落すのに何の障害もないので、竿先を下向けて、ギャフをそのまま落す。此の時、当然の事ながら、リールのハンドルを巻きながら竿先を下げる。後の全ムーブは００２７項のギャフ用大物補助システムを使った、ギャフの落とし込み、及びギャフ掛けに詳述した内容と全く同じである。

【実施例４】

【００２９】

図１３は本考案の大物用落し込みダブルギャフ１に特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システムの一種であるギャフ用簡易型補助システムの第二のモデル（第一の変形タイプ、Ｖａ）を組み付けた状態を示した説明図である。図１３を参照しながら、同ギャフ用簡易型補助システムの第一の変形タイプ（Ｖａ）を組み付けた場合の詳細を以下に説明する。ギャフ用簡易型補助システムの基本タイプ（００２８項）はループ体７に軟性、繊維系素材（ナイロンシュリンゲ）を使用していた。此れに対して、本第一の変形タイプ（Ｖａ）はループ体７Ｖａに硬性、金属性素材（撚りステンレスワイヤー）を使用したシステムであり、その両端を本考案の大物用落し込みダブルギャフ１のリング１３に巻いてスリーブ止めにすると図１３の状態になる。簡易で、機動性が高く、特に動きの激しいヒラマサ等の青物などに適用できる。青物釣りでは遠投カゴを浮きの下に使用することが多く（若しくは一体型）、此のカゴ（ナイロンカゴとステンレスカゴの２タイプ有り）がループ体の通過の際の障害になり得る。ナイロンカゴの場合は柔らかいからあまり問題にならない。問題になり得るのはステンレスカゴの場合である。途中の障害を通過するにはループ体がなるだけ円形を維持していたほうが（即ち硬い方が）有利である。又ギャフをよく振らせて効率的にフッキングさせるには柔らかい方が有利である。ナイロンシュリンゲはその硬さ、すなわち円形の程度を調整し辛いのに対して、ステンレスワイヤーはその硬さ、即ち、太さを用途、用法に合わせて、両方の機能を持ちうるように適切に選択し、調整する事が容易である。本ループ体７Ｖａは、ギャフ用大物補助システム又はギャフ用巨魚補助システムに於ける接続体３ａ又は３ｃの機能と巻き体４の機能とを同時に果たさなければならない。即ち、１）ガイドとしての機能（途中の障害物を乗り越えていく機能）、２）揺動支点からのギャフの位置を魚のフッキングを狙った適度な個所に位置させる機能、３）ギャフを良く振らせて（動かして）効率的にフッキングさせる機能、そして、４）フッキング後の荷重受け体としての機能である。硬いワイヤーを使えばカゴの通過は有利だが、振れ（＝フッキングの良さ）は悪くなる。ワイヤーはその軸心に対する捻じり方向への動きが殆どできないので、その両端のループ７Ｖａ１，７Ｖａ２は大き目に作り、其れにより動き代を大きく取り、又ロープ５ｂＶａの連結には図示の通り、大きな内部スペース（即ち大きな動き代）を有する円環状連結具（安全環付きカラビナ）２を使った方が振れの点で有利であるが、点線で描写したようにロープ５ｂＶａを、プーリン結び等

で遊動状態にして、ループ体７Ｖａに直接連結することも可能である。又、ギャフ用簡易型補助システムの基本は、ループ体がギャフの一端側に連設されている事であるから、此の連設の仕方には色々なやり方が可能である（例えば、ステンレスワイヤーの両端をギャフのリング１３に直接取り付けるのではなく、両端を合わせてスリーブ止めにし、其れによって、独立したワイヤーのループを完成させ、此れとギャフ１のリング１３とを軟性、繊維系素材で連結するとか・・・図示略）。又振れ改善の為にはリング１３にシャックルをセットしてスイベルを連結した上で、このスイベルにループ体７Ｖａの両端ループ７Ｖａ１、７Ｖａ２を連結してもよい（図示略）。使い方としては基本タイプの場合と同じで、背側から此のループ体７Ｖａに手首を通して、マンタベルトから外した竿尻を通過させる。カラビナ２は重みがあるので、リング１３側に寄っており、後は上記００２８項の場合と同じである。

【実施例５】

【００３０】

図１４は本考案の大物用落し込みダブルギャフ１に特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システムの一種であるギャフ用簡易型補助システムの第三のモデル（第二の変形タイプ、Ｖｂ）を組み付けた状態を示した説明図である。図１４を参照しながら、「ギャフ用簡易型補助システム」の第二の変形タイプ（Ｖｂ）を組み付けた場合の詳細を以下に説明する。此処でも同様にループ体７Ｖｂとしてワイヤーを使用する。此処では、両端のループ７Ｖｂ１、７Ｖｂ２は円環状連結具（安全環付きカラビナ）２の側に位置させ、ギャフ１のリング１３を此のループ体７Ｖｂに通すと図１４の状態となる。この場合、ギャフは良く動く。此のループ体７Ｖｂに背側から手首を入れればギャフ１は重みがあるのでカラビナ２側に寄り、竿尻をマンタベルトから外して通過させる。後は００２８項及び００２９項の場合と同じである。

【実施例６】

【００３１】

図１５は本考案の大物用落し込みダブルギャフ１に特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システムの一種であるギャフ用巨魚補助システムを組み付けた状態を示した説明図である。図１５を参照しながら、ギャフ用巨魚補助システムを組み付けた場合の詳細を以下に説明する。ギャフ用巨魚補助システムは脱落防止機能付き円環状連結具２と、ギャフと前記円環状連結具２とを接続する柔軟性を有する接続体３ｃと、その一端４１は前記円環状連結具２に掛けられ、その他端４２はフリーとなっていて前記円環状連結具２に掛けることが可能な柔軟性の巻き体４（図１５は両端とも連結具２に掛けられ、閉じた状態を示す）と、前記円環状連結具２に掛けられた負荷軽減体６と、前記負荷軽減体６に通されたロープ５ｃとを含んで構成される。円環状連結具（安全環付きカラビナ）２は００２５項、ギャフ用大物補助システムの場合で述べた物と同じ物である。柔軟性を有する接続体３ｃ（シュリンゲ）も基本的には同じ物であるが、此処では、フィッシャーマン結び３ｃ３等で、両端を結んでループにしたシュリンゲ３ｃを使用する。一端側３ｃ１を本考案の大物用落し込みダブルギャフ１のリング１３に掛け、他端側３ｃ２を安全環付きカラビナ２に掛ける。巻き体４も００２５項で述べたのと同じラッピングワイヤー４である。此処では負荷軽減体６が新たに加わった。負荷軽減体６は具体的には滑車６を使用する。滑車６を動滑車として作動させ、負荷を半減させるものである。これは、単独で約４０キロまでの魚を上げられる事を意味し（実際は表面状態、摩擦抵抗による）、これは概ね、単独での巨魚引き上げを可能にする。滑車６の上部に付いているリング６１を、前記安全環付きカラビナ２に掛ける。この滑車６にロープ５ｃを通し、滑車６がロープ５ｃの真ん中に位置するようにする。両端は夫々ループにして、リス（細い割れ目、隙間）に打たれたハーケン等の支点に掛けられたシュリンゲにセットされたカラビナに掛けておく（図示略）。編みロープ５ｃで、最適モデルで、太さ８φ－１０φで、長さ約３０ｍである（長さも太さもいくらでも可能である）。滑車６で二つ折りにして、ダブルで使うので、最適モデルの場合で、高さ１５ｍ、実高距約１４メートルまで使える。安全環付きカラビナ２内の位置は、手前側から、滑車６、シュリンゲ３ｃ、そしてゲートの固定ピン側にラッピ

ングワイヤー４の一端のループ４１（他端４２はフリー）となる（図１５は両端とも閉じた状態を示している）。此処ではロープ５ｃの扱い、事前準備が特に大事で、キンクが起きない様、十分に扱いて伸ばした上で、又縺れない様にハーケン側が下に位置し、ギャフ側が上に位置するように配慮して置く。ロープ５ｃは、撚りロープは特にキンクしやすいので、滑車６使用のギャフ用巨魚補助システムの場合では、編みロープ５ｃである事が不可欠であるが、編みロープであっても、キンクする。ロープは通常ループ（輪）にして、持ち運ぶ。このループにする時一回巻くごとに、一回捻ってしまっているのである。そのまま、両端を持って引き伸ばせば、ロープ内に多数の捩れが存在する事になる。一端側から扱いて他端まで、伸ばし、今度は他端側から一端側まで扱いて伸ばし、この作業を２－３回繰り返す。滑車６をロープ５ｃ中央に持ってきた後、今度は滑車６側（ロープ中央側）から、両端側に二本一緒に扱いて伸ばす。その上で両端部をループにして、前記ハーケン側のカラビナに掛ける。此れで、キンクは完全にとれた。ロープ５ｃをダブル状態で、縺れない様にハーケン側が下に位置し、ギャフ側が上に位置するように配慮して置く。此れにより、事前準備が完了した。この後のラッピングワイヤー４の取り付け、落とし込みのムーブは、スタンディングからの取り込みであれば、００２６－００２７項に述べたギャフ用大物補助システム使用の場合と、基本的に同じである（滑車６が加わってロープ５ｃがダブルになっただけである）。ギャフ掛け及び引上げ時のムーブは次の００３２項で述べるムーブの４）以降と同じである。

【００３２】

置き竿からの取り込みであれば、上記ギャフセット（本考案の大物用落し込みダブルギャフ１＋特願２０１２－４６６５０のギャフ用巨魚補助システム）に、特願２０１２－４６６５０で発明提供されたプッシャー兼プーラーを組み合わせて使用する事により、特願２０１１－１７０９２６で発明提供された完全置き竿釣法を実行する事が出来る。此れにより、剛竿（アラ、クエ竿）を単独で置き竿に使った剛力ファイトの取り込みでも、竿下まで寄せた大物、巨魚を、釣り人が十分に離れた高く安全な場所から、誰の手助けも無く単独で、容易に、確実性高く、且つ安全に、実質的に捕獲し、且つ、足元まで上げる事ができる。プッシャー兼プーラーとは、軸部の反対側にU字型プーシャー部と同プッシャー部の一端側に位置するフック型のプーラー部とを一体成形した構造をなし、置き竿適用に於いて、前記軸部をタモの柄に取り付けて、前記プッシャー部で、ギャフに取り付けたロープギャフ用補助システムを押し出すのに使用する物である。完全置き竿釣法とは、大物、巨魚の取り込み及び大型外道の際の道糸先端でのラインカット処理を、竿を竿受けに置いたまま一切起こす事無く、実行するプロセスを含む釣法である。此の時の具体的手順は以下の通りである。前記００３１項に詳述の事前準備を完了させておく（ラッピングワイヤー４の他端４２はフリー）。又、前記プッシャー兼プーラーはタモ柄先端にセットしておき、竿後ろ側に於いておく。竿は竿受けに完全に支えられているので、両手が使える。全ムーブは以下の通りである。１）両手を使って、ラッピングワイヤー４を道糸ごと竿のリール上側（竿受けより先）に巻き、他端のループ４２を安全環付きカラビナ２に入れ、環を回して、ロックさせる。２）先端にプッシャー兼プーラーの取り付いたタモ柄を取り、Ｙ字部をラッピングワイヤー４に当て、ギャフセット（図１５）を竿先側に押し出す。３）すると、竿下部は少し上向きになっているとしても、竿先側は魚の重みで、下向きになっているので、ギャフセット（図１５）は自重で落ちる。４）すると、ギャフ１は自動的に魚の口元に到達するので、ダブルになったロープ５ｃを片手（通常右手）で一緒に掴んで、肘を支点に、鯛のテンヤ釣りをする要領（ダンベルを上下するようなやり方）で、手先を上下させる。５）すると、程無くズシリと重みが掛かる。これはギャフの針先がフッキングした証拠だから、そしたら力一杯ダブルになったロープ５ｃを一緒に引っ張り上げてやると、ガシリとギャフが食い込み、引き上げＯＫとなる。６）後は引き上げるだけであるが、引き上げる時は、ダブルになったロープ５ｃの片方を離し、もう一方だけを引き上げる。これに先立って、ロープ５ｃの両端は支点（正確に言えば、ハーケンにセットされたシュリンゲにセットされたカラビナ・・図示略）に掛けられているので、引上げ時にはロープ５ｃは滑車６を介してギャフセットを中間に位置させた状態で巨大なループを形

づくり、ギャフセットはラッピングワイヤー４により、ラインに掛かった状態になっている（図示略）。上記ロープ５ｃの一方だけを引けば、安全環付きカラビナ２にセットされた滑車６は動滑車として作動して、荷重は半分（摩擦抵抗は含めず）となるので、３５キロから４０キロの魚でも、一人で８メートルから１０メートルの高さであっても、８φ－１０φのロープ５ｃで、引き上げる事が出来る（当然の事として、事前に厚手の皮手袋をしておく）。以上により、置き竿取り込みで、釣り人が単独であっても、安定性及び確実性を維持したまま、取り込みを成就できる。

【産業上の利用可能性】

【００３３】

特願２０１２－４６６５０のロープギャフ用補助システム及び、必要により、プッシャー兼プーラーと組み合わせて使用する事により、釣り人は、寄せた大魚を、十分離れた場所から最短フッキング時間でフッキングさせ、且つ取り込む事が出来るので、水面からの高さ等の現場の状況の制約を受けずに釣りを行う事ができ、又、自己の安全性を維持して取り込みを行うことができ、更に、単独でできるので、適用範囲の拡大、利便性の向上、安全性の確保、単独大物釣行の可能化、大物釣行の低経費化を促進するポテンシャルを秘めており、釣り産業で利用可能である。

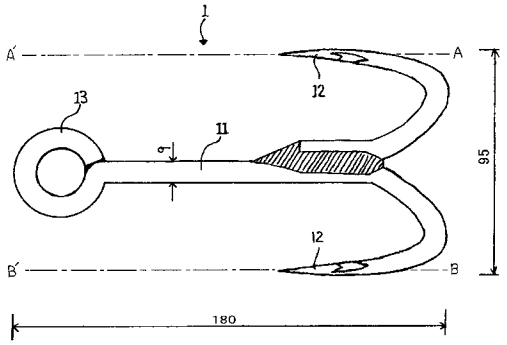
【符号の説明】

【００３４】

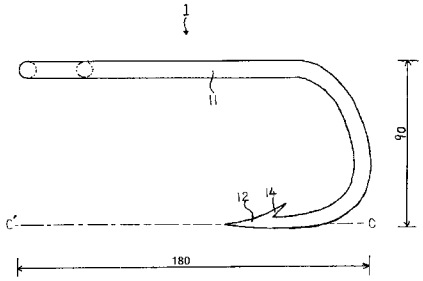
１　大物用落とし込みダブルギャフ
１１　軸
１２　フック
１３　リング
１４　カエシ
２　円環状連結具（安全環付きカラビナ）
２１　開閉部（ゲート）
２２　一端側
２３　固定ピン
２４　他端側（開口側）
２５　安全環
３ａ　接続体（ナイロンシュリンゲ）
３ａ１　一端（ループ）
３ａ２　他端（ループ）
３ａ３　プーリン結び
３ｃ　接続体（ナイロンシュリンゲ）
３ｃ１　一端側
３ｃ２　他端側
３ｃ３　フィシャーマン結び
４　巻き体（ラッピングワイヤー）
４１　一端側のループ
４２　他端側のループ
４３　一端側のスリーブ
４４　他端側のスリーブ
５ａ　ロープ
５ａ１　一端（ループ）
５ｂ　ロープ
５ｂ１　一端（ループ）
５ｂ２　プーリン結び
５ｂＶａ　ロープ
５ｂＶｂ　ロープ
５ｃ　ロープ

６　　負荷軽減体（滑車）
６１　　リング
７　　ループ体（ナイロンシュルンゲ）
７１　　一端部
７２　　他端部
７３　　フィシャーマン結び
７Ｖａ　ループ体（ステンレスワイヤー）
７Ｖａ１　一端のループ
７Ｖａ２　他端のループ
７Ｖｂ　ループ体（ステンレスワイヤー）
７Ｖｂ１　一端のループ
７Ｖｂ２　他端のループ
１１０　竿
１１０－１　竿尻
１２０　リール
１２０－１　ハンドル
１３０　道糸
１３０－１　ハリス
１４０　マンタベルト
Ａ－Ａ´，Ｂ－Ｂ´，Ｃ－Ｃ´　フックの先端部の軸心の延長線

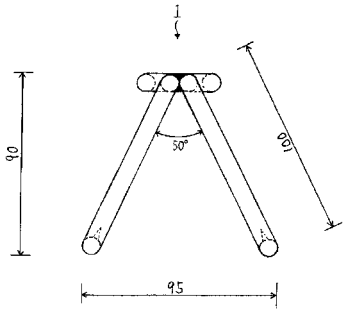
【図１】



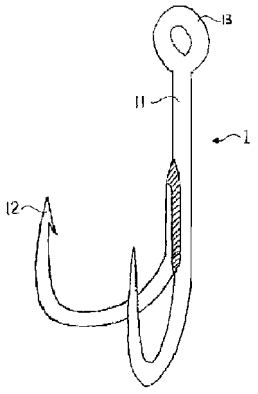
【図２】



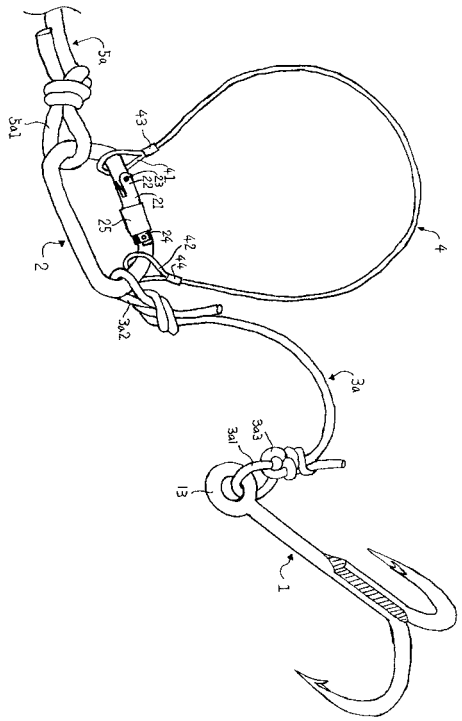
【図３】



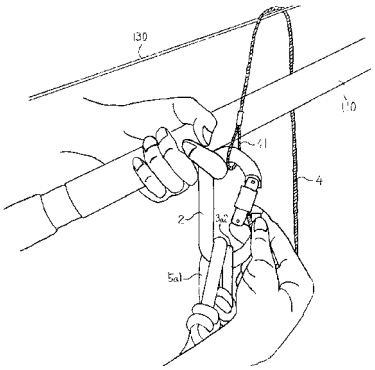
【図４】



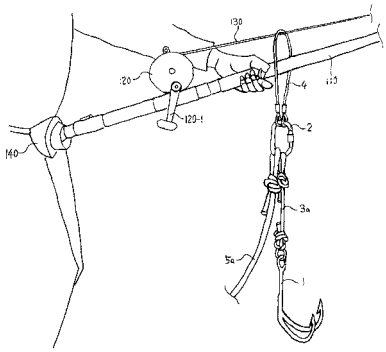
【図５】



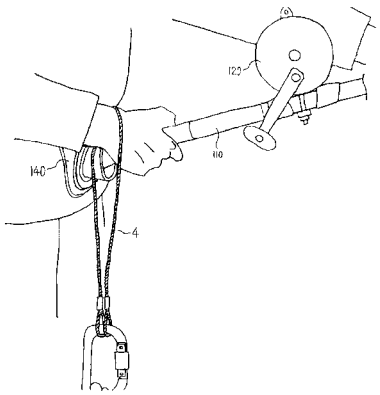
【図６】



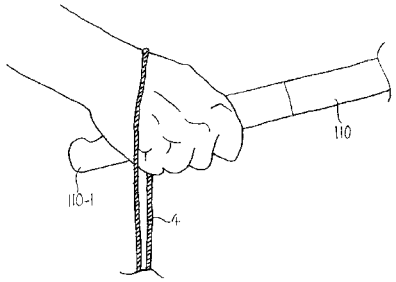
【図７】



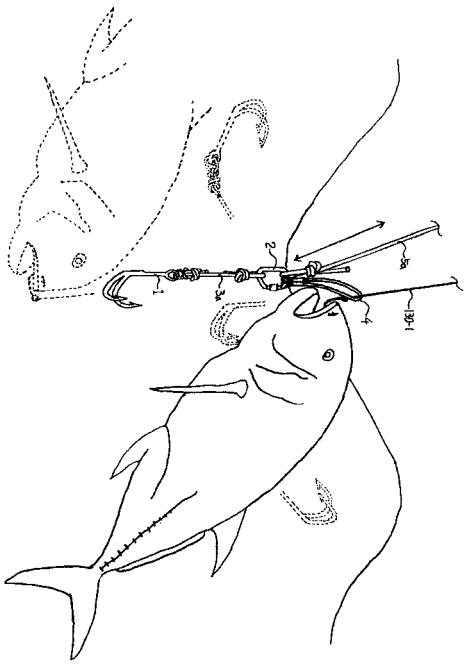
【図８】



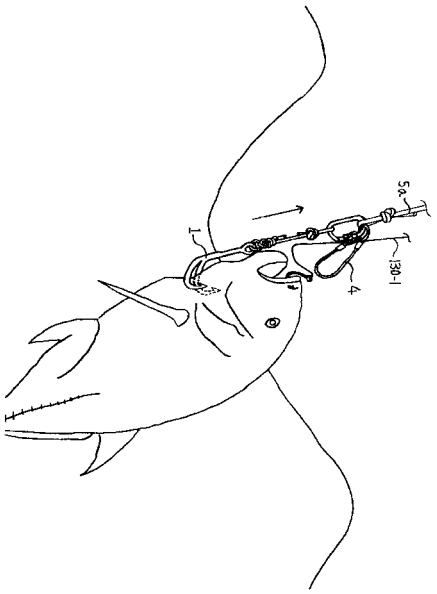
【図９】



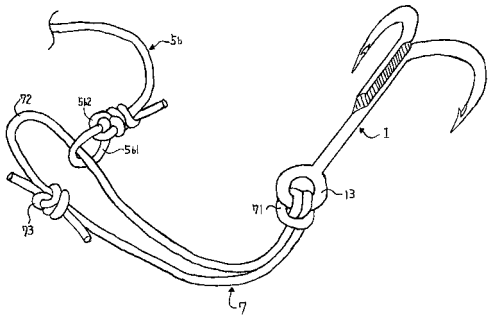
【図１０】



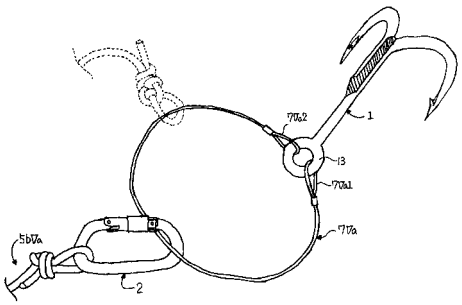
【図１１】



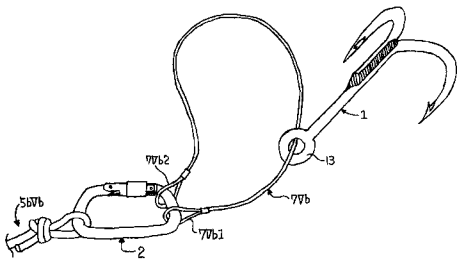
【図１２】



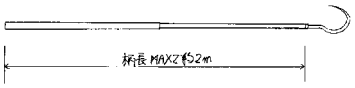
【図１３】



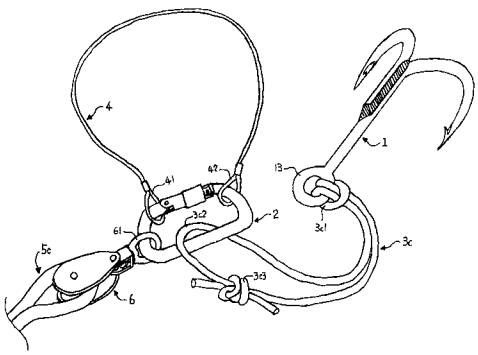
【図１４】



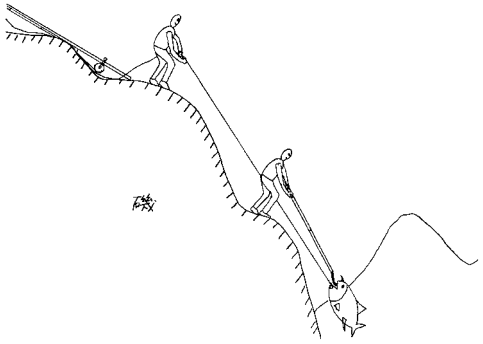
【図１６】



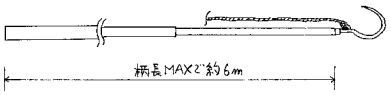
【図１５】



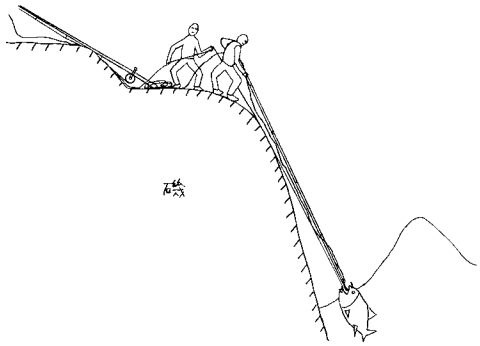
【図１７】



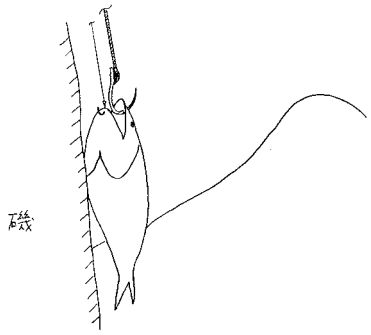
【図１８】



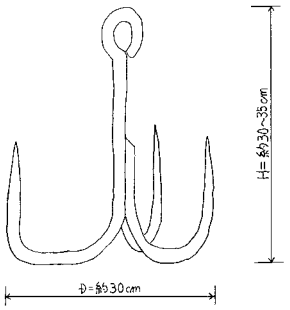
【図１９】



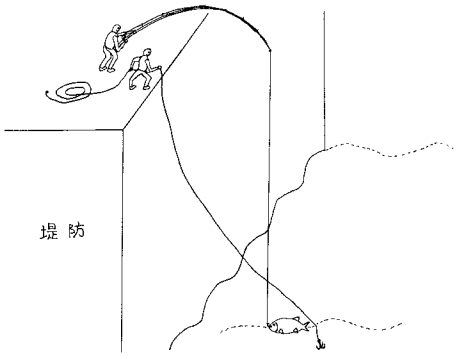
【図２０】



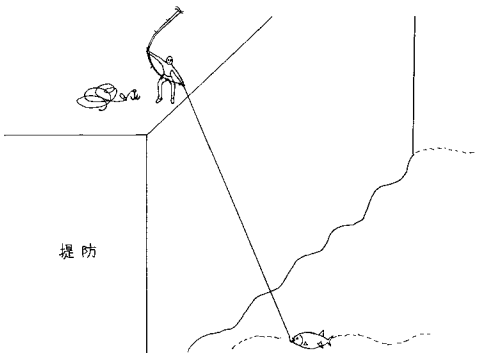
【図２１】



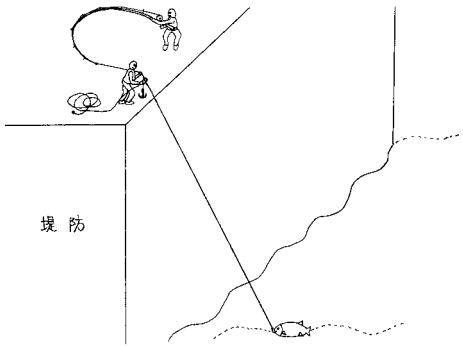
【図２２】



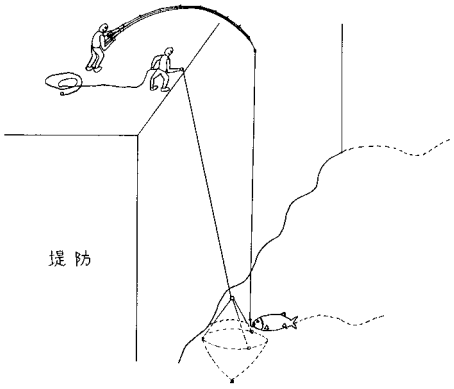
【図２３】



【図２４】



【図２５】



【図２６】

